

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第二十二課 あそこに のぼれば うみが
みえます：条件の表現 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2020-03-25 キーワード: 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002801

日本語教育映画解説22

基礎篇第二十二課

あそこに のぼれば

うみが みえます

——条件の表現 1——

国立国語研究所

前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするもので、全30課を昭和58年度までに完成した。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。

この第二十二課「あそこに のぼれば うみが みえます」の解説は、日本語教育センター日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室が企画・編集し、執筆にあたったものは、次のとおりである。

本文執筆 2., 4. 佐久間勝彦（企画協議会委員・東京外国語大学講師）
1., 3. 日向茂男（日本語教育センター日本語教育指導普及部
日本語教育教材開発室）

資料1., 2. 日向茂男, 清田潤（ // // ）

昭和61年3月

国立国語研究所長

野 元 菊 雄

目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的	2
2.2. 構成・内容	4
2.2.1. 解説書における場面、表現の扱い	4
2.2.2. 映画の場面、場面に現れる表現形式	5
2.2.3. 場面、表現についての解説	6
3. この映画の学習項目の整理	51
3.1. 複文の問題と条件の表現	52
3.2. 接続助詞の分類と条件の表現	57
3.3. 「と」「ば」「たら」「なら」が承ける形	59
3.4. 「と」「ば」「たら」「なら」について	61
3.4.1. 「と」	63
3.4.2. 「ば」	65
3.4.3. 「たら」	66
3.4.4. 「なら」	67
3.5. 再び条件の表現について	70
3.6. 日本語教育における「と」「ば」「たら」「なら」	76
4. 参考文献	79
資料1. 使用語彙一覧	85
資料2. シナリオ全文	116

1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩の日本語学習期における視聴覚教材として企画・制作されたもので、この映画「あそこに のぼれば うみが みえます」は、その第二十二課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次の通りである。

昭和56年度 日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

石田 敏子 国際基督教大学講師
木村 宗男 早稲田大学語学教育研究所教授
工藤 浩 国立国語研究所言語体系研究部研究員
窪田 富男 東京外国語大学教授
斎藤 修一 慶応義塾大学国際センター教授
佐久間勝彦 国際交流基金日本研究部職員
杉戸 清樹 国立国語研究所言語行動研究部研究員

国立国語研究所日本語教育センター関係者（肩書きは当時のもの）

野元 菊雄 日本語教育センター長
川瀬 生郎 日本語教育センター日本語教育指導普及部長
日向 茂男 " 日本語教育教材開発室長
清田 潤 " " 技官

この映画「あそこに のぼれば うみが みえます」は、日向茂男の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同社の前田直明氏があたり、また同氏はこの映画の演出も担当した。ただし演出の際の言語上の問題については、協議会委員及び日本語教

育センター関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育教材開発室が全体企画・編集を行い、執筆には、2., 4. は佐久間勝彦委員, 1., 3. は日向茂男があたった。また資料1., 資料2. は、日向茂男, 清田潤が担当した。全体の企画, また執筆にあたっては、この映画の企画・制作段階での意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理係
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画は、そのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・構成・内容

2.1. 目的

この映画「あそこにはのぼればうみがみえます」の主要な学習目的は、「と」「ば」「たら」「なら」など主として順接の接続表現を、そのサブ・タイトルが示すように「条件の表現 1」として提出し、その基本的な意味・用法についての理解をはかることである。なお、「ても」「のに」「けれども」「にもかかわらず」など逆接の接続表現は、「条件の表現 2」として、次の

第23課「いえが たくさんあるのに とてもしずかです」で扱われる。

この映画を補助教材として使う場合、すなわち別の教科書を主教材として使用しつつ、「と」「ば」「たら」「なら」などについて指導する際の参考もしくは確認として補助的に利用する場合には問題ないが、映画を主教材として第1課から順を追って視聴させつつ授業を行う場合には、教授法上とくに類似した文型の提出方法をめぐって立場が分かれるだろう。

類似した文型・表現の初級での導入法は、大きく、(1) 類似したものは、なるべくまとめて整理して提出し、その意味・用法上の相違などを対比させながら指導するのが効果的だとする立場と、(2) 類似したものはまとめて提出せず、より基本的なものだけを先に教え、その後少しずつ類似した文型・表現を与えていくのが効果的だとする立場とに分かれる。(筆者は(2)の、立場に立つ。)

約5分間のこの映画には、「と」「ば」「たら」「なら」がすべて含まれている。とすると、(1)の立場に立った場合には、この教材(映画)を、補助教材としても主教材としても使用することができるが、(2)の立場に立った場合には、補助教材としてすなわち別の体系的な教科書を使用して「条件の表現」を指導し「と」「ば」「たら」「なら」が出そろったところで、復習・確認のための教材として使用するのに有効であり、主教材として使用するのには必ずしも向いていない、ということができよう。

なお、類似した表現形式をまとめて(同じ課で)扱う場合に留意すべきことは、類似してはいても意味・用法の微妙に異なる表現形式の差異が十分明確になるような文脈を与え、学習者の理解をはかることである。すなわち、ある表現形式Aが自然に使えて、それと類似した別の表現形式A'が誤用もしくは不適切になるような用例を十分な数だけ用意する必要がある。とくに初級段階において、A、A'のいずれもが自然に使えるような用例を材料にして、A、A'の意味・用法上の相違を効果的に指導するというのは、無理があるばかりでなく学習者に不必要な負担を強いることにもなる。

しかしこうした観点から、この映画の台詞(用例)を指導すべき表現形式

との関連で検討していくと、必ずしもそのすべてが満足すべきものでないことがわかる。したがって、教室で指導にあたる教師は、自分に与えられた学習者に最も効果的だと思われる例文を数多く補うなどして、より有効な利用方法を工夫する必要がある。また、この映画を使用するからといって、「と」「ば」「たら」「なら」すべての意味・用法を習得させなければならないと考える必要のないことはいうまでもない。要は、学習目的などとの関連で教えるべき内容を厳選し、重点的な指導を行うことである。

「と」「ば」「たら」「なら」のような類似した表現形式の指導は、それを含む例文等を、十分な準備なしに教室で思いつくまま板書したりしていくと、いたずらに学習者を混乱させるだけの不本意な授業に終わることも少なくない。教師は、教室で教える際に「前件」「後件」「仮定」「確定」などの用語を使用する必要はないが、教材研究、教育内容の研究の一環として、指導事項となる表現形式に関連した先行研究にあたり、それぞれの意味・用法上の特徴、相互関係や相違点について十分理解を深め、例文や練習問題ひとつ作るにも細心の注意を払うことが望まれる。「この映画の学習項目の整理」（以下、「整理」と略す）、およびその終わりに示した参考文献などが役に立つと思われる。

2.2. 構成・内容

2.2.1. 解説書における場面、表現の扱い

本解説書では、映画の場面や言語表現を以下の通り扱うことにする。

1. この映画は、物理的な場面によって全体を五つに分けることができるので、それぞれを、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴとする。その一つひとつは、映画のストーリーの流れにしたがって便宜上さらに小さく分けることができるので、それぞれの小場面をⅠ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3……のように示すことにする。
2. 言語表現については、文単位で①、②……のように通し番号をつける。この文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文で用いられ

るものと共通である。文を変形して示すときには、①'、②'……のように'の印をつけ、変形して示す文が二つ以上ある場合には、"、"'のように'を重ねていく。なお、ここでの一文の認定はあくまで便宜的なものである。

3. この映画の中に直接現れていない文や表現を例示するときには、[1]、[2]……のように〔 〕付きの番号を付け、それを変形して示すときには上記2の場合同様'印をつける。

2.2.2 映画の場面、場面に現れる表現形式

映画は、登場する二人の女子大学生のうちの一人順子が、ほかの一人春子を自分の家の近くにある瑞泉寺にあじさいを見に行こうと誘い、さっそく次の日曜日に鎌倉の順子の家を訪れた春子に、日本画家である順子の父親も加わり、三人が瑞泉寺へ行き、境内に咲く美しいあじさいを眺めたりする、というストーリーである。

この映画が五つの場面に分けられることはすでに述べたが、それぞれの場面について、この映画の中心的指導事項である表現形式を整理すると以下のようになる。

	場 面	文 番 号	表現形式
I	<大学の教室で> 順子が春子を日曜日に鎌倉へ来るよう誘う	①～②	「といい」 「ば」 「と」
II	<たばこ屋で> 春子がたばこ屋のおばさんに道をたずねる	③～⑤	「なら」 「と」(復)
III	<順子の家で> 順子が、画家をしている父親に春子を紹介し、日本画の色の作り方などについて話す	⑥～⑧	「たら」 「と」(復) 「なら」(復)
IV	<瑞泉寺へ行く道で> 三人が話しながら瑞泉寺へ向かう	⑨～⑪	「なら」(復) 「と」(復)
V	<瑞泉寺で> あじさいを見、丘に登って海や富士山を眺める	⑫～⑭	「ば」(復) 「なら」(復) 「といい」(復)

2.2.3. 場面、表現についての解説

I 大学の教室で (①～㉔)

いかにも長雨を思わせるような雨の音。画面いっぱい古い大きな建物が映し出され、やがて二人の若い女性が外を眺める。一つの窓にズームアップされることからこの映画は始まる。その建物は大学、二人は大学生という設定なのだが、この映画を初めて見た学習者が、それぞれ、文部省か何かの官庁の古い建物、そこで働く二人の若い職員と考えたとしても別に不思議はない。それで学習上さほど大きな不都合はないのだが、教師が映画を見せる前に前提となる簡単な情報を与えておけば、その後教室でストーリーについて話し合ったりするときの事実関係に関する共通理解を得ることができるだけでなく、初級の学習者がたとえ台詞は十分理解できなかったとしても「あれが日本の大学の建物の一つのタイプなのだ」とか「女子学生はあんな服装をしているのか」などと、社会・文化的な事柄に興味を持つこともできるだろう。

カメラはすぐに教室内に移り二人の会話が始まることになるのだが、この場面を便宜上三つの小場面すなわち、

I-1 窓の外を見ながら (①～⑨)

I-2 順子が瑞泉寺へ行こうと誘う (⑩～⑮)

I-3 地図を描く (⑯～㉔)

に分けて、以下それぞれの言語場面、言語表現上の問題点を検討していくことにする。

ただし、これはあくまで教える側の確認であり、実際に教室で学習者に対して同様の内容について指導するわけではないことはいうまでもない。シナリオのコピーを学習者に配り一文一文解説していくような方法はむしろ拙いアプローチであると筆者は考えている。

I-1 窓の外を見ながら (①～⑨)

降り続く雨にうんざりしたという感じで春子が口を開く。以下、この小場

面での会話である。

春子「①毎日毎日、よく雨が降るわね。」

順子「②そうね。

③早くつゆが終わるといいな。」

春子「④うん。

⑤でも、今、あじさいがとてもきれいね。」

順子「⑥そうね。

⑦ああ、私の家の近くにあじさいがきれいに咲いているお寺があるわ。」

春子「⑧ああ、瑞泉寺でしょう。」

順子「⑨ええ。」

まず、最初の台詞で「毎日毎日」の意味が全くわからないという学習者はないと思うが、ここで「毎日」を重ねて用いる表現を確認しておくとうい。「毎週毎週」「毎月毎月」「毎年毎年」など、繰り返す頻度の著しいことを示す用法である。「いつもいつも」などもその延長線上にある表現だが、初級の段階では、この種の一般的なものを文以上の単位の中に含めた用例として提出するにとどめ、深入りしないほうがよい。たとえば以下のような例は、学習者に示さないほうがよいだろう。むしろ我々が考えてみたい例文である。

〔1〕 月、2,000円なら払えると思います。

〔2〕 月々、2,000円なら払えると思います。

*〔3〕 この町の人口は、年、減少しています。

〔4〕 この町の人口は、年々、減少しています。

次に、①の「よく」についてだが、初級段階では、その主な用法として以下の3つを提出するのが一般的である。

a. <頻度>

〔5〕 私は、よく図書館へ行きます。

〔6〕 私は、高校生のころよく図書館へ行きました。

b. <程度>

[7] 私にはよくわかりません。

[8] もう一度よく考えてみます。

c. <驚き> (感心・あきれ)

[9] こんな難しい問題、よくできましたね！

[10] 先生に対して、よくそんな失礼なことが言えますね！

春子の台詞「①毎日毎日、よく雨が降るわね。」は、c.の例として理解させてよいような音調だが、場面との関連で考えると、その基底にa.もb.も含んでいることがわかる。「条件の表現」をテーマとするこの映画を教材として、この「よく」に深入りする必要はない。なお、c.の例は、この映画の中にも後に「㉔ああ、どうも。㉕よくいらっしゃいました。㉖さあ、さあ。」というように現れる。

次に順子は「②そうね。」で共感を示し、「③早くつゆが終わるといいな。」と続ける。これは発話の音調に関することだが、シナリオで読むと、春子の①が聞き手の共感を求めるような調子で、順子の③が半ばひとりごとのといった感じがする。ところが映画では、①がひとりごとの、③は聞き手である春子の目を見つめ、しっかり話している。音調に関する表現練習は初級段階から必要なものだが、その場合はやはり「①毎日毎日、よく雨が降るわね。」は聞き手に語りかけ、「③早くつゆが終わるといいな。」はひとりごとの、と指導するのが基本であろう。

ここで、この映画の学習項目のひとつ「と」が現れるのだが、ここでの用法は「といい」という慣用的な表現として扱い、19 20 21 28 49 52 71 82 ㉔に現れる「と」とは区別して指導したほうがよい。同様の用法は、映画の終わり近くで㉕の「富士山も見えるかしら。」を受けて「㉖見えるといいね。」という形で現れる。

この「といい」を「ばいい」「たらいい」などと一緒にして扱うのはよいが、それらを「願望」の表現とするのは乱暴すぎる。映画の中の二例「③早くつゆが終わるといいな。」「㉖見えるといいね。」は、「願望」といってもよ

かろう。しかし、

[11] 君も、この辞書、買うといいよ。

[12] そんなに行きたかったら、行けばいいのに。

[13] 飲みたければ、飲んだらいいじゃないの。

[14] 君、留学するんだったら、この本、読んでおくといいな。

などは、話し手の「願望」を表しているわけではない。「といい」「ばいい」「たらいい」などは、実現していない、実現しにくい事柄についての話し手の肯定的な心的態度を表し、それらが文脈、とくに事柄の性格や実現の可能性、さらに文末の表現形式や意図などにより、「願望」や「アドバイス」（意見・忠告）、「評価」（意見）というように、意味的に異なった現れ方をする。後に添える終助詞だけを考えてもひとりごとの「…といいな」と言え「願望」、相手に対して「…といいね」と言ったり「…といいよ」と言ったりすれば「意見」や「忠告」を表すというようにそのニュアンスが違ってくる。また、

[15] わたしも一緒に行けばよかった。

となると、「後悔」を表すことができる。したがって指導の際は、2～4行程度の会話の形で文脈を与えるなどして提出することが大切である。

なお、「といい」「ばいい」「たらいい」は、例文 [12] [13] [14] で最も普通の「条件の表現」とともに用いられていることから、これらが、いわゆる「条件の表現」としての性格を著しく希薄にしていることがわかる。そこで、これらの表現は、一般的な「条件の表現」を導入する際にはあえて提出しないというアプローチも考えられよう。この「日本語教育映画基礎篇」でも、すでに第17課「あのいわまで およげますか」で、「…といい」が「条件の表現」に関係なく提出されている。

[16] じゃあ、このきかいにれんしゅうする といいですよ。(17—⑧)

[17] おにいさんにならうといいわ。(17—⑩)

[18] からだを、こうたてて、およぐ といいですよ。(17—⑳)

[19] もうすこし、おおきくて をかく といいですよ。(17—㉑)

すべて「アドバイス」とでもいう用法で、日常生活での使用頻度も高い。場面と結びつけて確実に身につけさせたい表現のひとつである。

③の台詞に含まれる「つゆ」や、⑤の「あじさい」などについてコメントすることは必要だが、この種の生活・文化・社会的事項を扱う際は、限られた授業時間内でどの程度の説明が適切かを十分考えるべきである。とくに海外で教える場合など、この種の話題で教師が饒舌になり過ぎることは問題である。「つゆ」「あじさい」については、この小場面の終わりで触れるが、それは教える立場にある我々のためのメモに過ぎず、学習者に伝えるべき情報はごく少量に限られよう。むしろ、日本語の学習としては、映画に出てきた「つゆが終わる」や、それに対する「つゆが始まる」などの表現を確認することが大切である。また、初級の復習としてこの映画を利用するような場合には、「つゆに入る」「つゆ入り」「つゆが明ける」「つゆ明け」などの表現も教える必要がでてくるかもしれない。さらに、「梅雨」が「つゆ」と読まれたり「ばいう」と読まれたりすることについてもコメントが必要かもしれない。その段階で「入梅」などという表現も出てくるのだが、関連表現を思いつくまま数多く提出することは必ずしも効果的ではない。

④の「うん」は、「③早くつゆが終わるといいな。」に対する共感・賛成を表しているが、ひとりごとのぼんやり発音されており、初級の学習者には、かろうじて聞き取れる程度の音声であるので、何回か聞かせてよく観察させるとよい。初級の学習者に「はい」「ええ」「うん」の丁寧さの程度の違いなどを理解させることは難しくないが、最も瞬間的・反射的な反応の表現であるだけに、学習者がそれらを十分適切に使い分けることは必ずしも容易ではない。中級以上に進んでも、相手かまわず「うん」を連発する外国人は少なくない。教師は、不適切な用法に接するたびに根気よく指摘してやる必要があるだろう。

次の春子の台詞「⑤でも、今、あじさいがとてもきれいなね。」の「でも」は、ここまでの二人のやりとりを受けていると考えたほうが理解させやすい。すなわち春子の心に、彼女自身の①（雨はもううんざり）と、それに続

く順子の②（早くつゆが終わらないかな）に表れたつゆについての否定的な感じ方とは異なる思い（つゆどきはあじさいがきれいだ）が生じたために、「でも」が使われたと考えてよかろう。

したがって、⑤の「いま」は、「この瞬間」の意ではなく「この時期（つゆどき）」と理解させたい。なお映画では、台詞① ② ③ ④の段階ですでに二人の背景にあじさいが見えており、そのあじさいが⑤と⑥でズームアップされる。話している二人には、はじめから雨に濡れるあじさいが見えていたという作りなのだろう。順子も同じことを感じていたかのように「⑥そうね。」と共感する。

あじさいの美しさということで順子は自分の家の近くの瑞泉寺を思い浮かべる。そのときの台詞が⑦である。「ああ」は、何かを思い出したり発見したりしたときに発せられる感動詞である。しかし、ついでにということで、先の「うん」などの用法に重なるぞんざいな肯定反応としての「ああ」を、ここで初級の学習者に提示する必要はない。また、④のところ、ひとりごとの的に用いる「うん」を扱う場合もなかろう。むしろ初級の学習者には、

[20] ああ、あれは先週の水曜日でした。

[21] ああ、ここにありましたよ。

などの用法を確実に身につけさせたい。英語を母語とする学習者などが、中級段階へ進んでからも平気で「Oh!」と叫ぶようでは困る。

⑦が連体修飾文であることに注意。構造的には「私の家の近くにお寺がある」という文の「お寺」の前に「あじさいがきれいに咲いている」という説明部分が挿入されたと考えればよい。ただ、この場面での意味的・表現意図的な面を考えれば、「あじさいがきれいに咲いている（場所）」が大切なのであり、その場所が寺であるか公園であるか植物園であるかなどは、ここでの話の流れを大きく左右するものではない。このような点を十分おさえた上で行くと、音声表現とくにプロミネンスについての練習なども有効なものとなる。

⑧の「ああ」については⑦で触れた。ここでは「(今、あなたが話してい

るお寺というのは) 瑞泉寺でしょう。」ということが理解でき、その文末の上昇音調からその発話が「確認」「念押し」であることが分かればよい。鎌倉に住んでいる人が自分の家の近くにあじさいのきれいな寺があると言えば、季節の草花などに多少関心のある人なら「ああ、瑞泉寺のことだな」と考える、というような知識が前提にない外国人学習者には、⑧の反応がやや唐突に感じられるだろう。⑧を聞いた順子も、別に「あなた、よく知ってるわね!」などと驚いたりせず、ただ「⑧ええ。」と応えている。(しかしながら、皮肉なことに、筆者が鎌倉にくわしい数人に確かめたところ、「あじさいで有名な寺」はむしろ「名月院」であるという。瑞泉寺は、梅や水仙の季節に話題になることが多いようである。)

以上が最初の小場面だが、ここでの二人のやりとりが親しい大学生同士の会話であり、スピーチ・レベルの低いものであることに十分注意させたい。同じ内容でも、あまり親しくない二人だったらどんな会話になるか、学習者に考えさせてみるのもよい。

A: 毎日毎日、よく雨が降りますね。

B: そうですね。早くつゆが終わるといいですね。

A: ええ。でも、今、あじさいがとてもきれいですね。

B: そうですね。ああ、私の家の近くにあじさいがきれいに咲いているお寺がありますよ。

A: ああ、瑞泉寺でしょう。

B: ええ。

だいたい、これに近い言い換えができれば、この段階の学習者としては合格といえよう。

①～⑧の会話を見てきたが、ここでこの小場面に現れた生活・文化・社会的事項として「つゆ」「あじさい」「瑞泉寺」に触れておこう。

【つゆ】 春の終わりから夏に移る途中に現れる雨の多く降る時期を言い、普通6月上旬から1か月～1か月半続く。西日本で最も著しく、北海道で

は、ある年とない年がある。高温多湿でカビがはえたりし、都市生活者には衣食住に問題の多い不快な季節だが、つゆの雨は田植に欠くことのできないものであり、この時期に雨が少ないと、農作物に影響があるばかりでなく、水力発電が十分に行えなくなったり、工業用水、飲料水が不足したりする。

【あじさい】 観賞用として庭に植える落葉低木で、6～7月ごろ白、淡紫色ないし濃紫色の花（実は萼片が^{がく}発達した装飾花）をつける。漢字で「紫陽花」と書いたりもする。映画の中の鎌倉瑞泉寺の境内に咲くあじさいを静止画像で観察させたりするとよい。

【瑞泉寺】 鎌倉駅の北東「紅葉が谷」に位置する臨済宗の禅寺で、1327年夢窓国師によって開山されたという。鎌倉時代につくられた庭園を残す唯一の寺である。鎌倉最大の面積（16万m²）を誇る境内は、1月の水仙にはじまり、梅、牡丹、さつき、あじさい、さざんかなど、一年中花の絶えることがなく、参拝客の目を楽しませてくれる。

なお、先にも述べたように「あじさい寺」などと呼ばれ、あじさいでより有名な鎌倉の寺は名月院であるようだ。名月院は、北鎌倉の駅から10分あまりのところであり、梅雨時の休日は境内を埋める数千株のあじさいを楽しむ見物客で賑わう。

I-2 順子が瑞泉寺へ行こうと誘う（⑩～⑮）

話は、あじさいの咲く瑞泉寺へいっしょに行こうという方向へと展開する。以下がこの小場面での会話である。

順子「⑩そうだ、今度の日曜日、都合がよければ、私のうちに来ない？」

⑩いっしょに瑞泉寺へ行きましょうよ。」

春子「⑪ええ、お天気がよければ行ってみたいわ。」

順子「⑫お客が来れば、父もとても喜ぶわ。」

⑬毎日、ひとりで仕事をしているから。」

春子「⑭ご迷惑でなければ、お邪魔してもいいかしら。」

すぐ気がつくことは、この映画の学習項目のひとつ「ば」が多く使われていることである。⑪ ⑭以外の台詞にはすべて「ば」が含まれている。まずここでは、「ば」の用法を大きく二つに分けて、その用例（映画の後の部分に現れる台詞も含む）を確認しておこう。

◎ 「ば」の用法(1)

- ⑩ 都合がよければ、私のうちに来ない？
- ⑫ お天気がよければ、行ってみたいわ。
- ⑬ お客が来れば、父も喜ぶわ。(⑭毎日、ひとりで仕事をしているから。)
- ⑮ ご迷惑でなければ、お邪魔してもいいかしら。

これは、話者にとって不確実な事態を話者が仮定的に提示して、話者の立場、意見などを述べる用法である。個別的な事象に関することであり、反復的でないため、「たら」で置き換えることはできるが、「と」で置き換えることはできない。仮定的な条件性を強く出すことから、「たら」を用いた場合より因果関係を強く表すことになる。

◎ 「ば」の用法(2)

- ⑲ あそこに登れば、海が見えますよ。
- [22] 場所が違えば、習慣が違うのは当然でしょう。

この用法での「(前件)ば、(後件)」の後件は、前件が成立したときの必然的、習慣的帰結を表す。普通、「と」「たら」で置き換えが可能である。「ば」は「と」に比べ、前件と後件との間の時間的な関係が薄く、その因果関係(必然的)には具体性が薄く、論理性が強いため、社会的通念を表現した格言、ことわざなどにもよく使われている。

- [23] 備えあれば憂いなし。
- [24] 三人寄れば文珠の知恵。
- [25] 犬も歩けば棒にあたる。

さて、「ば」の意味・用法についてのくわしい検討は、「整理」に譲り、こ

の小場面での会話を見ていくことにしよう。

「⑩ そうだ、今日の日曜日、都合がよければ、私の家に来ない？」は、「ば」の用法(1)の用例として示し、「たら」と置き換えることができると述べたが、ここでの会話が親しい女子大生同士のものであることを考えると、「都合がよかったら」のほうがむしろ自然に感じられる。また、すぐ後の「⑪ ええ、お天気がよければ、行ってみたいわ。」でも「たら」を用いたほうが生き生きとした感じになる。これは「ば」が「たら」に比べ、仮定的な条件性・因果関係を強く表すため、相対的にやや冷静で屈っぽい物言いになるからであろうか。

⑩のはじめの「そうだ」は、⑦ ⑧の「ああ」と同様、話し手が何かを思い出したり発見したりしたときに用いる表現だが、初級の学習者には理解できれば十分だろう。「ああ」より突発的で強い表現だけに、場面との関係で用いる範囲も制限されるからである。積極的に指導するのなら、⑦の「ああ」は「そうだ」で置き換え可能だが、⑧ではそれができないということなども説明できなくてはいけない。

⑩「今日の」は、「この次の」というここでの意味が確認できればそれでよい。「今日の」は<未来>だけでなく、

[26] 今度の戦争で、はじめて原子爆弾が使われました。

[27] 今度の戦争はいつまで続くんでしょうね。

などの用法のあることは、ずっと先へ行って適切な文脈の中で指導したほうが効果的だろう。

⑩の「都合がよければ」は、「都合がよかったら」などとともに慣用的表現といってよいが、相手によって「ご都合が……」とすべきことは初級の学習者にも教えておいたほうがよいだろう。(⑮には「ご迷惑」「おじゃま」がある。) 余裕があったら、参考会話の形で「あの……、今度の日曜日は、都合が悪いんですが……」「ご都合、いかがですか。」などの関連表現を提出するのもよい。

「私のうちに来ない？」の「来ない？」については、その上昇イントネー

ションに着目させ、これが相手の意志・予定などを問う表現であり、ここでは勧誘の表現になっていることをしっかりおさえる必要がある。スピーチ・レベルにも注意させ、日常よく使われる基本的な動詞については、「来ない」——「来ませんか」、「行かない」——「行きませんか」、「食べない」——「食べませんか」、「飲まない」——「飲みませんか」など、自由に使い分けができるようにさせたい。女性がよく用いる「来ませんか？」は、中上級へいって生の用例にぶつかったときに説明すればよいだろう。

ここでの「私のうち」は、「ウチ」と発音されているが、少し前の⑦では「私のイエ」と発音されている。少し先の⑩では「イエ」である。今日、「ウチ」「イエ」の使い分けの制限はさほど厳しくないように思われるが、初級段階では、「イエ」は「建物」、「ウチ」は「家庭」といった、ごく基本的な考え方で用例を説明しておくのも一つの方法である。「日本事情」の授業なら「家制度」「ウチとソト」などへ発展させてみるのも面白い。

「⑩いっしょに瑞泉寺へ行きましょうよ。」の「行きましょう」は、学習者がすでに学んでいる勧誘の表現だが（第13課「おみまいに いきませんか」の解説書参照）、先の⑩「来ない？（来ませんか）」と違って相手の意志や予定を尋ねる場合には用いられないことに注意させたい。「来ない？」の動作主は相手であり、「行きましょう」のそれは話し手と相手である。

[28] コンサートの券が一枚あるんですが、行きませんか？

*[29] コンサートの券が一枚あるんですが、行きましょう。

?[30] コンサートの券が二枚あるんですが、いっしょに行きませんか。

[31] コンサートの券が二枚あるんですが、いっしょに行きましょう。

この[31]などは、初級の学習者が頻繁に口にしようとする台詞だが、日本語としては適切さを欠く。⑩のように終助詞「よ」を添えるとさらに別の文脈を必要とするようになる。「__ましょう」には、「__ませんか」と違って、相手の都合・意向を無視して強引に誘うという要素がその根底にあるということが大切である。したがって、初級の学習者に勧誘表現の「__ましょう」の用法としてまずしっかり身につけさせたいのは、相手（聞き手）が決

して反対（拒否）しないと思われるような場面、たとえば熱いコーヒーが運ばれてきたときの「さあ、飲みましょう」、どこかへ行く予定で待ち合わせ、皆がそろったときの「さあ、行きましょう」などである。やさしそうで難しいのが次のような用例である。

[32] A：今度の日曜日、皆で瑞泉寺へ行くんだけど、あなたも行かない？

B：今度の日曜日？

A：ええ。

B：月曜日に試験があるから、ちょっと……。

A：そんなこと言わないで、いっしょに行きましょうよ。

B：うーん、どうしようかなあ……。

A：ねえ！ 行きましょうよ！

なお、⑩の場合もそうだが、女子学生同士でなく男子学生同士の場合には、「ましようよ」は使えないといった制限も加わる。したがって、コミュニケーションの道具という観点からすれば、「行かない？」「行きませんか？」「いらっしやいませんか？」などの表現に習熟させることのほうがはるかに大切だと思われる。

⑫の「ええ、お天気がよければ、行ってみたいわ。」で「ば」が使われ、これが「よかったら」に言い換えられることは先に述べた。いわゆる仮定条件の用法であり、

[33] お天気がよければ、富士山が見えるのよ。

などと違って「ば」を「と」で言い換えることができないことを確認しておきたい。

さらに⑫では、「行ってみたいわ」というように、補助動詞「みる」が用いられていることに注意しておきたい。春子が「行きたいわ」と言わずに「行ってみたいわ」と言ったことで、ここでは「春子はおそらく瑞泉寺へ行ったことがないのだろう」というようなニュアンスがつかみとれればよい。なお、「もう一度、行ってみたい」というような用法は、話し手がそうすることによって何か新しい情報が得られたり、確認されたり、新しい効果が期

待されるような場合である。

⑬の「お客が来れば、父もとても喜ぶわ。」は表現として難しい。先に、14ページで「ば」の用法を(1) (2)と大別し、この映画の中の用例を確認した際、この⑬は(1)に含めたが、(2)とする考え方もあろう。順子が自分の父親を話題にしている、もし、

⑬' 「お客が来れば、父はとても喜ぶの。」

と言ったのなら、反復的・習慣的で

⑬'' 「お客が来ると、父はとても喜ぶの。」

に近い用法になるだろう。すなわち、「いつも……なのだ」というニュアンスを帯び、先の「ば」の用法(2)に含めることができる。しかしながら、映画にある⑬「お客が来れば、父も喜ぶわ。」を、⑬'、⑬''と同じように扱うことには少し無理がありそうだ。(これは筆者の語感である。因みに、「教師用マニュアル・ユニット5」の29ページでは別の扱いをしている。)ここでは、「お客が来れば」を、それ以前の会話の流れから「あなた(春子)というお客が来れば」と考え「今度の日曜日に、あなたが来ることになれば、父もきっと喜ぶと思うわ。」と解釈したほうが自然に思われる。すなわち話者にとって不確実な事態を、話者が仮定的に提示して話者の立場、意見等を述べるといった「たら」では置き換えることができるが、「と」では置き換えることのできない「ば」の用法である。

⑭の「毎日、ひとりて仕事をしているから。」は、「⑬お客が来れば、父も喜ぶわ。」という意見(判断)の根拠を示すために添えられた説明である。

「⑮ご迷惑でなければ、お邪魔してもいいかしら。」の「お邪魔してもいいかしら」は「行きたい」という意味の婉曲的表現と考えてよい。(したがって、⑯では順子がそれを受けてすぐ「じゃあ、地図を書くわ。」といっている)なお、同じ場面でも、同年輩の男子学生なら「お邪魔してもいいかな」「行ってもいいかな」などとなる。この「かしら」も「かな」も、ひとりごとの的にすることによって「願望」「許可」「依頼」「質問」などの表現に軽い遠慮の気持を添える働きをする。

[34] (翻訳してくれそうな人に向かって) これ、誰かに中国語に翻訳していただこうかしら。

[35] (使わせてくれそうな人に向かって) このタイプライター、使ってもいいかな。

[36] (手伝ってくれそうな人に向かって) よかったら、少し手伝ってもらおうかな。

以上、I-2として⑩～⑮の会話を見てきたが、I-1と同様これが女子学生同士のやりとりであることに注意させ、スピーチ・レベル(スタイル)を確認しておくことよ。文末だけ拾ってみても「……来ない?」(⑩), 「……行きましようよ。」(⑪), 「行ってみたいわ。」(⑫), 「……喜ぶわ。」(⑬), 「……仕事をしているから。」(⑭), 「……お邪魔してもいいかしら。」(⑮)というように、その特徴がよく現れている。(なお、⑮の「ご迷惑でなければ, お邪魔してもいいかしら。」だけが、その前後と比べ幾分丁寧さのレベルが高いように思われる。) 余裕があれば、会話の二人の性別や、上下関係などを変えてみて、それぞれの発話がどうなるかななどを考えさせるのも、中・上級段階へ発展する応用練習として有益であろう。

I-3 地図を描く(⑩～⑳)

次の日曜日に春子が順子の家を尋ねることになったので、順子は早速紙を出し説明しながら地図(最寄りバス停から自分の家までの略図)を書き始める。以下、この小場面での会話である。

順子「⑩じゃあ、地図を書くわ。

⑪鎌倉で三番のバスに乗ります。

⑫大町でバスを降ります。

⑬この道を少し行くと、たばこ屋さんがあります。

⑭ここで、左の道に入ると、すぐ小さな橋があります。

⑮橋を渡って、二本目の道を左に曲がると、右側の四軒目の家です。」

春子「⑯ありがとう。」

この小場面で、映画の学習項目のひとつ「と」が初めて登場する。(19) 20
21) 個々の台詞を見る前に「と」の基本的な用法を確認しておこう。

◎ 「と」の用法(1-a)

[37] 彼は、立ち上がるとそのまま何も言わずに部屋を出て行った。

[38] 雨が止むと涼しい風が吹き始めた。

これは、前件が起きてから後件がそれに引き続き起こったことを表す用法であり、[37]のように前件・後件の主語が同一であることが多い。この点で「て」の用法と重なる面がある。

◎ 「と」の用法(1-b)

[39] ふと見ると、外はいつの間にか暗くなっていた。

[40] 家に帰ると、彼から手紙が来ていました。

[41] 実際に会って話してみると、彼は意外に真面目な男だった。

これは、前件で述べられた動作・作用の結果として後件で何か事柄・事態や状況を発見・認知したことを表す場合の用法であり、普通、前件・後件の構文上の主語は異なるが、後件の発見・認知の主体はあくまで前件における動作主と同一である。

◎ 「と」の用法(2)

[42] すっかり日が短くなり、このごろは5時になると真っ暗になる。

[43] 1に2を足すと3になる。(1+2=3)

19 この道を少し行くと、たばこ屋さんがあります。

20 ここで、左の道に入ると、すぐ小さな橋があります。

21 橋を渡って、二本目の道を左に曲がると、右側の四軒目の家です。

22 左の道をまっすぐ行って、二本目の道を左に入ると、右側にあります。

49 この色は、青と緑を混ぜるとできるわ。

52 これは、この色と、この色を混ぜると……。

71 このあたりは夏になると、大勢の人が来ます。

82 つゆになると、よく見る花ですよ。

㉔ もう少し行くと、瑞泉寺です。

これは、前件から必然的・自動的に導き出されることを後件で述べる場合の用法であり、後件の文末には、要求、命令、勧誘、決意などの話し手の意志表現は現れていない。

さて、くわしくは「整理」で検討することにして、この小場面での会話の流れを追ってみよう。

㉔の「じゃあ」は、先の小場面で春子が次の日曜日、順子の家を訪れる意志のあることを表明した後の順子の反応で、ここでは「あなたが来るのならば」の意である。「地図を書くわ」は、男子学生なら「地図を書くよ」となることなどにも注意させたい。

ここでひとつ問題がある。㉑㉒㉓㉔のスピーチ・レベルがそれ以前の順子の台詞「……私の家に来ない？」(㉑)、「地図を書くわ。」(㉒)など異なる点についてである。その理由については、学生から質問が出ない限り（いや、たとえ質問が出て）問題にしないほうがよからう。企画協議会委員の一人として、筆者は個人的には、ここでのスピーチ・レベルをそろえておくべきであったと反省している。（最終的な映画の台詞が「です」「ます」体になったのは、ぞんざい体にした場合、女子学生同士の会話ということで終助詞の扱いなどが複雑になるのを避けようとしたためかもしれない。）この場面では順子が地図を書きながら説明しているわけだが、テレビの料理番組の講師などが自分の手を動かしながら話したりするとき、そのスピーチ・レベルが前後と多少異なってくるといったことはありそうである。しかし、映画のこの部分を同種のものとして説明するには無理があると思う。また、ここでの順子が多少冗談半分に「さあ、皆さん、これから説明しますから、よく聞いて下さい。」というように小学校の先生口調で話しているのなら、順子がここで少しふざけて……という解釈もできようが、映画の音声からその種の雰囲気を感じ取ることは困難に思われる。

㉑～㉔では、特に助詞の用法を確認しつつ見ていくとよい。㉑「鎌倉で三

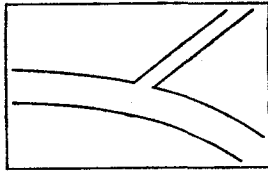
番のバスに乗ります。」が*「バスを乗ります」となったりしないように注意させたい。なお、この「鎌倉」が「鎌倉駅」の意であることも確認したい。

⑱「大町でバスを降ります。」では、*「大町に」としたり、*「バスからら」としたりしないよう注意させたい。中級レベルへ進んでも*「大学から卒業しました」などと言ったりする学習者がいる。「出発点」や「離脱点」を表す「を」である。十分注意したいところである。なお、画面を注意深く見ている学習者には「大町」が、単に地名ではなくバスの停留所の名前であることが理解されよう。

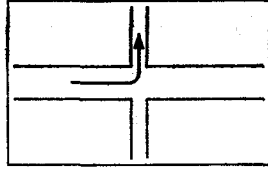
⑲では、「この道を少し行くと……」の「を」に注意させたい。「通過点」を表す「を」である。⑳の「橋を渡って二本目の道を左に曲がる……」に「角を曲がる」「階段を上がる」「空を飛ぶ」などの用例を加え、しっかり理解させる必要がある。「この道」の指示語「この」の用法が正しく理解されるためには、学習者が話し手、すなわち地図を書きながら説明している順子の立場（視点）で考えることが肝要である。また、「たばこ屋さん」という表現も「薬屋さん」「魚屋さん」「果物屋さん」「電気屋さん」「八百屋さん」などの例とともに確認しておくとういが、とくに学習者が大学生以上の場合など、改まった場面では「さん」をつけないほうがよいという注意も与えておきたい。

なお、日本の「たばこ屋」という店のあり様は、来日経験のない外国人学習者にとってイメージしにくいことがあるだろう。我々の身近にあるたばこ屋が単にたばこを売る店にとどまらず、この映画の場面のように道を尋ねたり、そこに置いてある電話を使うために金をくずしてもらったりするときにもよく利用される、ということなどはなかなか理解されにくい。

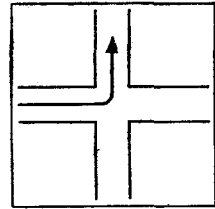
㉑では、⑲の「この」同様、指示語「ここ」の用法を確認した後、「ここで、左の道に入る」の助詞に注目させたい。「ここ」は「たばこ屋さん（のところ）」の意である。とすると「たばこさんのところで左の道に入る」となる。「節目」を表すような「で」と考えてよからう。用例を加えるなどして確認するとよい。「左の道に入る」は、画面を見ていると道が二又のよ



(図1)



(図2)



(図3)

うになっていく「その左のほうの道」の意味であることが学習者にも理解されるはずだが、ここで大切なのは、その「左の道」の道路が、(図1)のように(本道と比べて)相対的に狭いということである。VTRに画面を静止させる機能がある場合には、それを画面で確認させるとよい。

〔44〕 つぎの角を左に入ってください。

が自然に使えるのは、(図2)のような場合であり、(図3)のような場合には、

〔45〕 つぎの角を左に曲がってください。

がより適切な表現となることもおさえておく必要がある。

㊸では、「二本目の道を左に曲がる」の助詞の用法を確認しておきたい。ほとんど同じ意味を「二つ目の角を左に曲がる」で表す方法も学習者はすでに知っているはずである。(筆者の語感では、後者により自然さを感じる。)また、「二本目」「四軒目」「二つ目」などの表現も確実に身につけさせなければならぬ。「二本目の道」「二本の道」の区別がつかないようでは困る。「右側の四軒目の家です」が「(私の家は)右側の四軒目の家です」の意であることも確認したい。

順子の説明が終わり、春子が㊸「ありがとう。」と礼を言い、この小場面は終わるのだが、感謝の表現としての「ありがとう」は、たとえその前に「どうも」を付けたとしても、そのまま目上の人に対して用いるのは不適切である。(話し手が子供の場合は別だが、)目上に対しては「ございます」を添えて用いるよう指導すべきである。

II たばこ屋で (㉔～㉘)

画面が替わる。ちょうどバスが止まったところなのだろう、春子が降りてくる。雨は降っていない。春子の服装も違う。映画やテレビドラマを見慣れている学習者は、ここで「ああ、約束した日曜日のことだな」と了解するだろう。

春子が歩き出したところですぐ画面が替わり、たばこ屋に近づく春子のうしろ姿が映し出される。ここで日本人なら、春子が順子の説明の中にあつたたばこ屋のところまで来てそのたばこ屋でそれから先の道を聞くのだと理解するだろうが、この段階の外国人学習者には「ただ誰かに道を尋ねた」としか理解されないかもしれない。先に述べたように、日本の「たばこ屋」という店のイメージがつかめないからである。ひらがなで書かれた「たばこ」という看板も画面上が少し切れているうえに、このショットはごく短いのだが、日本人には、たばこのポスターらしいものが一、二枚見え、年輩の婦人が店番をしているところが目に入った瞬間に「たばこ屋」であることが理解されよう。映画のストーリーを理解するのにどうしても不可欠という情報ではないのだが、「あのおばさんは、誰でしょうか」と聞いて学習者の理解を確認してみるのも興味深い。

以下、この場面での会話である。

春 子「㉔すみません。」

㉔長谷川さんのお宅は、この近くでしょうか。」

おばさん「㉕ああ、日本画の……。」

春 子「㉖ええ。」

おばさん「㉗長谷川さんのお宅なら、すぐそこですよ。」

㉘左の道をまっすぐ行って、二本目の道を左に入ると、右側にあります。」

㉔の「すみません」は、初級の学習者が単なる詫びの表現と誤解しなければよい。「遠慮のある呼びかけ（前置き）」の例を加えるなどして理解を確か

なものにしておきたい。なお、映画の中の春子の発音は、「スイマセン」となっている。若い人々の間では、この方が優勢になっているようである。

㉔で、初めてこれから訪問する順子の姓が長谷川であることがわかり、次の㉕で、毎日一人で仕事をしているという順子の父親が日本画家であるらしいことがわかるのだが、この映画を初めて見る学習者にそれを求めるのは無理だろう。「長谷川」という姓を初めて耳にする学習者も多いだろうし、「日本画の……」だけで「日本画家」だと判断するのも難しいからである。

「長谷川さんのお宅」が「長谷川さんの家」であることは理解させたい。ただし、初級の学習者にこの種の用法を覚えさせる必要はなかろう。「お宅」の用い方としてより大切なのは、直接目上の人に「お宅へ伺ってもいいでしょうか」などと言うときの用法である。なお、「お宅もこの学生さんですか？」というような用法は、条件がしっかりわからないまま使うと危険でさえあるので教えないほうがよい。

㉕の発話全体は「……は、この近くでしょうか。」という質問の形式をとっているが、これが単なる疑問文でないことは初級の学習者にもわからせるべきである。「近くでしょうか」と問われて「はい、近くです」と答えたのでは不十分だということを理解させる必要がある。すなわち、「……は、この近くでしょうか」の表現意図が「……は、どこでしょうか」にあることに気づかせることが大切である。映画の場面でも、㉔で「長谷川さんのお宅なら、すぐそこですよ。」と答えたたばこ屋のおばさんは、㉕ですぐ道を教えている。何か書こうとした人が「ボールペンありますか？」と聞いたり、たばこを吸おうとしている人が「マッチある？」などと聞いた場合の表現意図が把握できるよう指導することは、初級段階でも可能なはずである。

㉕の「ああ」は㉗ですでに触れた。「日本画の……」は「日本画の長谷川さん？」の意であろう。映画の台詞のイントネーションから判断する限り、シナリオの「日本画の……」は「日本画の？」と表記するほうが適切だろう。それは、いわゆる省略ではなく、前の発話を受けた（限定を加えての）確かめと考えられるからである。なお、シナリオで「○○○……」と表され

る発話を何でも「省略」としてかたづけるのは考えものである。現実の会話では、未完結の文で十分ということも多いし、ほかの話し手の発話によって中断された場合もあるからである。

㉔の「ええ」で、春子には順子の父親が画家であることがわかっていたのだということが理解される。つまり「長谷川」「日本画」などは、映画を見ている人にとってのみ新情報ということである。なお、社会・文化的事項に属する「日本画」については、Ⅲ—2で触れることにする。

㉕の「長谷川さんのお宅なら、……」で、初めて学習項目のひとつ「なら」が現れる。詳しくは「整理」に譲り、ここでは「なら」の用法を大きく二つに分けて確認しておこう。(映画に全く現れない「……たなら」については考えない。)

◎ 「なら」の用法(1)

[46] (もし) 明日雨なら、あさって来てください。

㉑ 冬なら、よく見えるんだが。

断定することの難しい事柄を前件で仮定(想定)し、後件でそれに対する話し手の判断(意向)を述べる用法であるが、この典型的な用例はこの映画に現れない。

◎ 「なら」の用法(2)

[47] { A 田中さんいますか?
B 田中さんなら、隣の部屋にいますよ。

[48] { A 田中さんいますか?
B 田中さんはいないけど、山田さんならいますよ。

㉒ 長谷川さんのお宅なら、すぐそこですよ。

㉓ あじさいを見るなら、瑞泉寺がいいですね。

㉔ ああ、瑞泉寺へ行くなら、いっしょに行きましょうか。

㉕ 瑞泉寺へ行くなら、こっちの道が近いよ。

㉖ 東京から遊びに来るなら、この辺は近いですからね。

前件もしくはそれ以前の「主題」を確認したり、新しく「主題」を提出したりして、それを後件に続ける用法であり、仮定性は希薄である。

たとえば、順子の父親の台詞⑨「あじさいを見るなら、瑞泉寺がいいですね。」などは、その直前の順子の⑧「そろそろ、あじさいを見に行きましょうよ。」と春子の⑩「ええ。」を直接的に受けており、話し手が「瑞泉寺がいい」という意見を述べるための「前提」（娘とその友達があじさいを見に行くということ）を仮定したり想定したりする必要はない。すなわち、順子と春子の態度はすでにはっきりしているのであり、話し手がそのときそれを認知（確認）したにすぎない。「そうか、君たちはこれからあじさいを見に行くのか。（納得）それじゃあ瑞泉寺がいいな。（意見）」といったところだろう。

なお、「行くなら」という「動詞＋なら」の用法は除々に劣勢になってきているように思われる。とくに若い人々の間では、ほぼ同じ意図を表す表現として「行くんだったら」が一般的であり、「行くのなら」がそれに続き、「行くなら」はその次ということになるだろう。さらに、「行く（の）ならば」となると、「行ったなら」「行ったならば」などと同様、その話し手かなりの年輩者と感じる若者も多いようである。

⑨に戻って、ここの「すぐそこ」が「すぐ近く」「すぐそば」の意であることを確認しておきたい。「すぐ」が「距離があまり離れていない」、「時間があまりたっていない」などの意を表すことも、やさしい例文で復習しておきたい。そのうえで、後に⑳ ㉑などの「すぐ」を学習者に考えさせるとよい。

たばこ屋のおばさんの説明㉓は、情報の内容としては、先の場面（I-3）で順子が地図を書きながら述べた㉒とほぼ重なる。ただこ屋では、表現のし方として㉒の「左の道に入る」が「左の道をまっすぐ行く」、㉒の「二本目の道を左に曲がる」が「二本目の道を左に入る」、㉒の「（私の家は）……右側の四軒目です。」が「（長谷川さんのお宅は）……右側にあります。」

となっている点を確認しておきたい。「入る」「行く」などの動詞や、ともに用いられる助詞については⑳㉑のところでも簡単に触れた。なお、㉘では映画の学習項目のひとつ「と」が使われているが、これは㉑ ㉒ ㉓で確認した用法と同種のものである。(20ページ参照)

㉘の後、すなわちたばこ屋のおばさんの道順説明の後、画面は静かな住宅街に変わって垣根などが後ろへ流れていき、やがてある家の門をとらえる。説明された通りに歩いて長谷川宅へ向かった春子の視点で見た実景という作りである。

Ⅲ 順子の家で (㉘～㉙)

画面が変わり春子が順子と共に庭に入って来ることで、春子が無事、着いたことが示される。ここでは、順子の家での場면을便宜上、

Ⅲ-1 順子が春子を父親に紹介する (㉘～㉙)

Ⅲ-2 日本画について話す (㉙～㉚)

Ⅲ-3 三人で瑞泉寺へ行くことになる (㉚～㉛)

の三つの小場面に分けて考えていくことにする。

Ⅲ-1 順子が春子に父親を紹介する (㉘～㉙)

順子と春子が庭に入って来るように見えるが、それに続く場面から二人は画家である順子の父親の仕事場に向かっていったのだということが理解される。門を入れて裏に回った、庭に面した一室が画室なのか、離れのようになっている仕事場なのか画面からは断定できない。

この小場面での会話は以下の通りである。

順子「㉘すぐわかりました？」

春子「㉙ええ、たばこ屋さんで聞いたら、すぐわかりました。」

順子「㉚そう、じゃ、よかった。」

(画室で仕事をしている父に向かって)

順子「㉛お父さん……。」

順子「㉓お友だちの春子さん。」

父「㉔ああ、どうも。」

㉕よくいらっしやいました。

㉖さあ、さあ。」

春子「㉗お邪魔します。」

父「㉘そちらへどうぞ。」

春子「㉙はい。」

春子「㉚はじめまして。」

父「㉛いつも順子がお世話になっています。」

春子・順子「㉜まあ。」(笑い声)

父「㉝お楽にどうぞ。」

春子「㉞はい。」

父「㉟ちょっと失礼。」

まず㉕で注意させたいのは、終助詞「か」を伴わない疑問文とそのイントネーションである。㉕ ㉖にの後半を対照させて、「すぐわかりました。」と「すぐわかりました。」の違いを理解させる必要があるが、実は、終助詞「か」の有無に関係なく、学習者は、スピーチ・レベルを下げた「すぐわかった?」と「(うん)すぐわかった。」の「質問」と「応答」という意味の違いがわからなくてはいけない。

[49] a. これですか?(質問)

b. (ああ,) これですか。(納得)

などの聞き分けや読み分けは、初級の学習者にも確実にできるように指導したい。

㉙の「ええ、たばこ屋さんで聞いたら、すぐわかりました。」は㉕の応えであるが、㉕ ㉖の「質問」「応答」のポイントが「すぐ」にあることは、春子がすでに到着しているその場面から明らかである。順子の描いた地図にもあったたばこ屋まで来て、少し心配になった春子とそのたばこ屋で道を聞き、

その結果全く迷うことなく長谷川宅に着くことができた、というような意味合いが、㊸の「すぐ」に込められている。それを聞いた順子が「㊸そう、じゃ、よかった。」と言うが、「迷わなくてよかった」程度の意味であることは、初級の学習者にも理解できるだろう。

しかし、この種の応答表現は、初級の学習者がその代表的なもの、たとえば、

[50] 「それはいいですね。」

[51] 「それはよかったですね。」

[52] 「それはいけませんね。」

[53] 「それは大変でしたね。」

[54] 「それはそれは……。」

などを、きまり文句として覚えたとしても、それらを適切に用いることは決して容易ではない。適切な応答をするためのひとつの必要条件すなわち相手の発話内容を正確に聞き取る聴解力が伴わないことが多いからである。

さて、ここの㊸で学習項目のひとつ「たら」が初めて現れる。まず、「たら」の用法を次の二つに大きく分けていくつかの用例を確認しておこう。

㉠ 「たら」の用法（1-a）

[55] この授業が終わったら、研究室に来なさい。

[56] 春になったら、私のほうからおじゃまします。

[57] 来月、試験が終わったら、スキーに行きましょうよ。

[58] 教室に入ったら、タバコを吸ってはいけません。

㉡ 乾いたら、その上からぬります。

前件で述べられたことが完了・実現した段階で生ずる事態を後件で述べる用法で、前件の仮定性は希薄である。すなわち「PたらQ」は、いずれ成立するが今はまだ成立していないPが成立（実現）し「た時点で」、「…た後で」程度の時間的規定を与えているに過ぎない。いずれも、先に見た「ば」「と」で置き換えることができない。

◎ 「たら」の用法(1-b)

- [59] きのうち買物に行ったら、偶然田中さんに会いました。
[60] 家に帰ったら、彼から手紙が来ていました。
[61] 実際に会って話してみたら、彼は意外に真面目な男だった。
⑩ たばこ屋さんで聞いたら、すぐわかりました。

これらも前件が完了・実現してから後件が起きているが、前件・後件のいずれもが完了・実現している例である。「ば」で置き換えることはできない。「たら」を用いる場合、前件で述べることに強い意図・計画があるわけではなく、前件の後で「たまたま」「幸い」「あいにく」後件が起こった、といった含みを持つことが多く、[60][61]のように後件で何かを「発見」した、「認知」した、という性格が強まるほど、先の「と」の用法(1-b)と重なることになり、「と」による置き換えが可能になる。

なお、[60][61]は、「と」「たら」のいずれもが自然に使える例だが、「と」のほうがやや客観的であり、書きことば的であるように思われる。さらに、「たら」に比べ、「と」で接続された前件と後件は、非常に近接した時間内に起こることや状態であり、瞬間性が強いように感じられる。

◎ 「たら」の用法(2)

- [62] もし寒かったら、ストーブをつけてもいいですよ。
[63] もう少し練習したら、上手になりますよ。
[64] 明日のピクニックは、雨が降ったら中止です。
⑩' 都合がよかったら、私の家に来ない。
⑪' お天気がよかったら、行ってみたいわ。
⑫' もう少し濃くしたかったら、この色を入れるんです。
⑬' そんなふうにしたかったら、この筆でこうします。
⑭' よかったら、お父さんもどう？

話者が断定することのできない事態を前件で仮定的な条件として提示し、それを前提とした話者の意向等を後半で述べる用法であり、「ば」の用法と重なる。「ば」を用いた場合と比べ、因果関係がやや弱く、個別的性格が強

まるようである。

こうしてみると、「たら」は先に見た「ば」「と」「なら」と比べ用法上の制限がゆるやかであり、話者は後件において命令・禁止・依頼・勧誘・助言・願望・意志などを自由に表すことができることがわかる。したがって、指導にあたっては、少なくとも使用する条件の表現として、まず「たら」を確実に身につけさせるというアプローチも考えられよう。

なお、この映画では、「たら」の用例として「ば」と置き換えの可能な用法(2)の例が三つで最も多く、「ば」「と」で置き換えられない用例(1-a)と「ば」で置き換えられない(1-b)の例はそれぞれ一つずつしか現れない。学習者の表現活動を豊かにする「たら」の有用性を考えれば、用法(1)がもっと強調されてもよかったように思う。指導にあたって例文や参考会話を補うなどの工夫が望まれるところである。

⑳に戻る。「たら」の用法(1-b)と考えられるこの例の前件「たばこ屋さんで聞いたら」は、バスを降りて少し歩き、たばこ屋の近くまで来て不安になった春子が、順子の道順説明にもあったたばこ屋で聞けばわかるだろうと思って尋ねたわけで、多少の意図や期待はあったことになる。普通「たら」の用法(1-b)が前件で述べることに強い意図・計画がないとされるのは、前件・後件の意図的・計画的関係を表すことに中心的なねらいがあるわけではないということであろう。それは、

㉑'' たばこ屋さんで聞いたので、すぐわかりました。

㉒'' たばこ屋さんで聞いたから、すぐわかりました。

㉓''' たばこ屋さんで聞いたために、すぐわかりました。

などと比べてみれば明らかである。

㉑㉒の「わかりました」の「わかる」と、後の㉓「……知ってる？」㉔「知らないわ」の「知る」の違いも学習者には難しいもののひとつである。「映画解説12」の28ページを参照されたい。

順子が仕事中の父親に声をかける。それが㉓の「お父さん」だが、その音

調が「オトーサン」でも「オトーサン」でもなく「オトーサン」のようになっているのは、順子の呼びかけに父親の仕事を中断するタイミングを心配する心理の表れと考えることができようか。

絵筆を持って仕事をしていた父親がすぐに顔を上げたので、順子はさっそく春子を紹介する。

㊸の「お友だちの春子さん。」は、紹介する順子の声だけ。そのときの画面で、紹介される春子の顔のアップ。人を紹介する表現としては「こちらは〇〇（さん）です。」というような基本表現しか知らない初級の学習者もあるかもしれない。そんな学習者には、より自然な実用的な表現の例として㊸は最適といえよう。ただしこんな場合、日本ではまだ姓で紹介するほうが多いのではないだろうか。また、「お友だちの春子さん」の「の」が同格を示す「の」であることは、わかりやすい例文を補うなどして確認しておくとい。

㊹の「ああ、どうも。」は、現実にはよくある挨拶表現だが、意味を限定しにくい場合が少なくない。この場合も、「どうも遠いところを……」「どうもわざわざ……」などと補うよりは、特定場面での漠然とした感謝の表現として理解させるほうがよいだろう。ただしその場合大切なのは、イントネーションはもちろん、それを言うときの表情・動作などで感謝の気持や好意が過不足なく表現されていることである。こうした非言語的表現についての指導は、映画やテレビドラマなどの実例を十分観察させた後、教室で実際に学習者を立たせて演技させたりすることが効果的である。

㊺は、目上もしくは初対面の来訪者を歓迎するときの最も一般的な表現。

㊻の「さあ、さあ。」は、人に何かを勧めたり促したりするときの表現。この場合は「上へあがれ」の意味だが、実際の場面では非言語的な要素から、その「何か」が理解されるのが普通である。残念ながらこの映画では、話し手である順子の父親の右手が画面に入らないが、注意深く観察すれば上半身の動きから右手の動きが十分伺えるだろう。

そこで春子は画室に上がるのだが、ここでは㊼「お邪魔します」と言う前から上がっている点に十分注意させよう。より一般性のある表現「失礼しま

す」と共に、目上の相手の領域に入るときの挨拶表現を確認しておきたい。さらに「お邪魔しました」や「失礼しました」は、それぞれどんな場合に行う表現なのかなども、場面を明らかにした会話例で具体的に示すとよい。たとえば、路上で目上の人と別れるとき「失礼します」は自然だが、「お邪魔します」とは言えない、ということなども大切である。

㊸は、画室に上がった春子に対して順子の父親が座る場所を示す台詞だが、省略されている動詞が何かなどを考え「そちらへどうぞ」の助詞「へ」に着目したりすることは、学習者にとってあまり有益ではないだろう。そのまま、目上もしくはあまり親しくない人などに対して、座ったり腰かけたりする場所を指定する一般的な定型表現として理解させるほうがよい。ただし、「こちら」は話し手の近く、ここでは「そちら」だから相手すなわち春子が立っている場所からそう遠くないところを指しているのだということは、画面を見ていなくても把握できなくてはならない。事実、映画では順子の父親が絵筆を持ったまま右手を前に出し、春子の足元を示している。

春子は、「㊸はい」と応えて座った後、一呼吸おいてやや改まった調子で「㊹はじめまして」と挨拶する。そのときの身体的行動を観察すると、春子はきちんと正座した後、上体を折るようにしてすなわちかなり深く頭を下げている。また、それに対して順子の父親も、軽く頭を下げて応じている。挨拶表現などは、その運用に際して動作・表情を含むこのような両者のタイミングのとり方が最も難しい。外国人学習者にどこまで指導すべきかは一概に言えないが、限りなくネイティブに近づきたいと願う学習者がいる限り、教える工夫をしなければならないことはいうまでもない。

㊺の「いつも〔X〕がお世話になっています。」もきわめて一般性の高い定型化された挨拶表現である。話題の人(X)が本当に世話になっている場合ももちろんあるが、全くそうでない場合も少なくない。そこが定型表現らしいところである。したがって、その応答として真剣に「実は、私は何もお世話などしていないんですが……」などと言うことは珍しく、何となくあいまいに「いえ、いえ、とんでもない……」とか「いえ、こちらこそいろいろ

……」などと応じるのが普通である。「いえ、十分なことが何もできず……」などの応答もあり得るが、こういう台詞も挨拶表現という雰囲気の中で言われた場合、話し手の真意(本音)はつかめないものである。この辺のことになる、我々日本人の間でも上手・下手(?)の個人差が少なくないわけで問題は複雑である。この種の表現の使用を控えようとする立場があつて当然だし、使用の程度・範囲について差があるのは自然だからである。

㊸で、順子と春子はほとんど同時に「まあ」と言い、顔を見合せて笑う。「まあ」は意外な気持(驚き)などを表すときに女性が用いる感動詞だが、ここで二人が順子の父親の「いつも順子がお世話になっています」に何を感じたのか、実は理解に苦しむ。若い二人には、順子の父の挨拶㊸があまりにも紋切り型で儀礼的に感じられ、それが意外だったということなのだろうか。世話をしたり世話になったりするという意識の全くない親しい友達である二人にとって、大人の社会でごく普通に用いられているそのような定型的な挨拶表現がひどく異質なものに感じられたということなのだろうか。

㊹の「お楽にどうぞ。」は、相手にくつろぐことを勧める定型表現であり、普通正座している人に足を崩させるときに用いられる。ここでも順子の父親が、手にした絵筆で春子の膝のあたりを示しつつ、この表現を使っている。ただし、このような定型表現は、一応そう言うのが礼儀というように場面にセットされていることも少なくないので、その言葉をそのまま受け取らないことも多い。映画の中でも春子は、「㊹はい。」と応えるが正座を崩したりする様子はない。

㊺の「ちょっと失礼」は、会話場面を一方的に中断するとき用いられる表現。相手が目上の場合には、「㊺'ちょっと失礼します」「㊺''ちょっと失礼いたします」なども用いられる。中座して部屋を出たり電話に出たりするときに頻繁に使われるのだが、映画のこの場面では順子の父親が㊺の台詞の後、絵の道具をかたづけ始める。

Ⅲ-2 日本画について話す (46~59)

日本画の作品を前にして、話題は自然に絵の色やその出し方になっていく。以下、この小場面での会話である。

春子「④⑥いい色ですね。

④⑦こんな色が自由に出せたら、すばらしいわ。

④⑧難しいんでしょうね。」

順子「④⑨この色は、青と緑を混ぜるとできるわ。

④⑩ねえ、お父さん。」

父「④⑪ああ、これですか。

④⑫これは、この色と、この色を混ぜると……。

④⑬ほら。」

父「④⑭もう少し濃くしたかったら、この色を入れるんです。

④⑮ほら。」

春子「④⑯ここのすてきだわ。」

父「④⑰そんなふうにしたかったら、この筆でこうします。

④⑱乾いたら、その上からぬります。」

画面は、春子の肩越しに制作中の日本画を映し出す。「④⑥いい色ですね。」は、その絵に見入っていた春子が発した感嘆の台詞である。この時の画面の中心にある色から考えると、それは水の部分を表す色のようなものである。

続けて春子がひとりご的に言う台詞が④⑰である。このときカメラが春子を正面から捕えるので、誰に語りかけるということもなくひとりご的な物言いが学習者にも観察されるはずである。

この④⑰で「たら」が使われているが、この「……たらすばらしい」は、先に見た③の「……といい」と同じ用法である。(8~10ページ参照)ここでは、簡単にはできないことが実現していることに対する感嘆の表現になっている。「こんな色が」の「こんな」は、単なる話し手からの距離の問題だけではなく、水の色のすばらしさに心を奪われている春子にとって、その色が

心理的にきわめて近いことを示している。それに続く「色を出す」という表現が、語句の問題として難しいだろう。

春子の④はひとりごとの的であったが、続く「⑤難しいんでしょうね。」が、はっきり順子に向けられた台詞であることは画面を見ていればわかる。初対面の、それも仕事中の画家に直接聞くのを避けたのだろう。この⑥には、素人に出せないのは当然、熟達した画家にしか出せないようなすばらしい色、といった含みさえある。

ところが、娘である順子は遠慮がないから、あっさり「⑦この色は、青と緑を混ぜるとできるわ。」と言い、「⑧ねえ、お父さん。」と確認を求める。この「ねえ」は「ねえ、そうでしょうか？」という念押し。ここで用いられている条件の表現の「と」については先に見た。(20~21ページ参照)

⑨の「ああ」は、先の⑦に近い。「これですか」が下降型のイントネーションであることに十分注意させておきたい。話題になっている対象を、三人の話し手が「こんな色」(⑩)→「この色」(⑪)→「これ」(⑫)というように表していることを確認するとよい。

⑬は、順子が⑪で説明した水の色を作り方を父親が実演して示すときの台詞である。⑪の音声による理解が、⑬で視覚的に確認されることになり、視覚教材の強みが発揮される。ここでの「と」も⑪と同じである。少し学習の進んだ段階で使用するような場合には、ここでの「～と～を混ぜる」と「～に～を混ぜる」「～を～に混ぜる」の意味の違いなどを確認するとよい。

⑭の「ほら」は、聞き手の注意を喚起する感嘆詞。この段階では、基本的な用法として⑮ ⑯が理解されればよいが、改まった場面で目上の相手に対して用いるのは難しいということを教えておきたい。学習が進むにつれて以下のような用法が理解されていこう。

[65] { A: 田中さんの車はどれですか?
B: ほら, あの白いスポーツカーですよ。

{ A: 何て名前だったっけ, ほら, 先週いっしょに行った鎌倉のお寺。
[66] B: ああ, 瑞泉寺でしょう。

(A : そう, 瑞泉寺。

[67] { A : 図書館に行ったら, あったよ, この本。
B : ほら, 俺の言った通りだろ。

[68] ほら, 見ろ!

㉔で「たら」が現れるが, これは「ば」で置き換えることの可能な仮定条件を表す「たら」の用例として, この映画で最初のものである。(31ページ参照)

ここで順子の父親は, やや濃い色を作ってみせるのだが, ㉔の「この色」が具体的にどんな色なのか画面ではよくわからない。常識的に考えれば, 濃紺か黒系の色だろうか。㉕の「ほら」で作られた色が示され, 混ぜた皿を持った手もとがUPになる。

画面は, 春子のUP, すぐに目線が下がり絵のUPに替わる。そしてまた春子の感嘆の台詞。それが㉖なのだが, 実は「ここ」がどの部分なのか分りにくい。形容動詞「すてきな」を外国人学習者が適切に用いるのは難しいようだ。理解できればよく, この段階で無理に使わせる必要はないだろう。

㉗で, 順子の父親はまたすぐ実際に描いてみせるのだが, ㉘で「これ」を使った同じ話し手が, ここでは「そんな」を使っている。㉙の春子, ㉚の順子の父のそれぞれの目線からも, 話題になっている絵の箇所が春子に近そうであることがうかがえる。ここでの「たら」の用法は㉔と同じである。映画の作りとして残念なのは, 「㉚そんなふうにしたかったら, この筆でこうします。」の「そんなふう」が実際に「どんなふう」なのか, また「こうします」が「どうする」のか視覚的によく分からないことである。同様のことが次の「㉛乾いたら, その上からぬります。」にもいえる。㉗と㉛は連続して示されるが, 日本画の絵具はそんなにすぐ乾くのか, また画面では, 説明のように「その上から」塗っているようには見えないがどういうことか, などの疑問が湧く。そして, 結局この画家は何を示そうとしたのか明確ではないが, これらの点については学習者から疑問が出されるまで触れる必要はない。

㊦で使われている「たら」は大切である。「ば」や「と」で置き換えのきかない「たら」の用法である。この映画では、この種の用例が少ないので、30ページに示したような例をやさしい会話文の形で提示するなどして理解を深めるとよい。

ここで、この小場面の中心的話題であった日本画について少し確認しておこう。

【日本画】 普通、「洋画」「西洋画」などに対して、古くから日本で形成されてきた絵画を「日本画」という。この呼び名は、明治に入ってから一般化したものであり、それ以前は、「土佐派」「狩野派」「住吉派」などというように流派としてとらえられることが多く、日本の伝統的絵画には一括した呼び方はなかったようである。明治維新後、文明開化の風潮によって西洋絵画の影響をうけた画派が急速に大きくなったが、それに対抗するようにして、それまで細かく分かれていた各流派を乗り越えた形で、新しい国画として形成されたのがこの「日本画」であるという。

西洋伝来の油絵がキャンバスに油絵具を使って描くのに対して、「日本画」では普通、絹や紙に書く。また、「西洋画」では豚の毛の筆を使うことが多いが「日本画」では柔らかい羊の毛の筆を使うのが普通である。使う絵の具は、絵の種類、技法などによって異なる。単色画の場合は、墨一色が普通である。これには、線だけで表現する「白描」、墨を濃淡の面で表す「水墨画」などがある。また、彩色画の場合には、岩絵の具や水絵の具を膠水にかわで溶いた絵の具を使うことが多い。今日、「日本画」は大きく変わりつつあり、新しい性格が加わり、新しい表現技術が生まれ、純日本的な「大和絵」に近いものから「西洋画」に近いものまでさまざまである。

指導に際しては、興味のある学習者が具体的な作品に触れることができるように、代表的な作品を収めた画集などを用意しておくといえよう。

Ⅲ-3 三人で瑞泉寺へ行くことになる(㊧~㊨)

順子が日本画についての話を終わらせ、話題はあじさいを見に行くことに

移っていく。この小場面での会話は、以下のとおりである。

順子「㉙そろそろ、あじさいを見に行きましょうよ。」

春子「㉚ええ。」

父 「㉛あじさいを見るなら、瑞泉寺がいいですね。」

順子「㉜よかったら、お父さんもどう？」

父 「㉝ああ、瑞泉寺へ行くなら、いっしょに行きましょうか。」

順子「㉞わあ。」

春子「㉟はい。」

順子は日本画の話の適当に切り上げて早くあじさいを見に行きたいのだから。それが㉙に現れているが、ここでは「そろそろ」の用法について確認しておこう。話題になっている事柄やその時機が近づいたということだが、その時間がその状況と相対的な関係にあることはいうまでもない。のんびりした調子で、

[69] そろそろスキーのシーズンだね。

などと言えば、2, 3週もしくはそれ以上を指したりもするが、喫茶店などで談笑していて一人が、

[70] そろそろ行きましょうか。

と言い、相手が「そうですね」と同意して立ち上がった場合など、「そろそろ」の示す時間的幅はごく短いものになる。「そのうちに」などの用法にも同様のことがいえる。学習者が日本で生活している場合には、日本人と接したり日本人同士の言語生活を観察したりする中で、たとえば遊びに来た客が、

[71] もうそろそろ失礼しなくちゃ……

と言ってから3時間以上も帰ってくれなかったり、日本人の友達に、

[72] そのうちにご招待しますから、是非ご家族で……

などと言われて楽しみにしていたのに、その後一年間以上何の話もなかったり、といった経験を通して教科書や辞書に書かれていない言語表現の実際が理解されていくことになる。

なお、映画のこの場面での「そろそろ」の現れ方だが、本当はもう少し時間が経過してからのほうが典型的な用例としては理解しやすい。他の作品を見たり、お茶（仕事場では許されないのかもしれないが）を飲んだりして時間がたってからのほうが分かりやすい。全体がきわめて短い映画の苦しいところである。

㉔は、㉓に対する春子の同意。

そこで、二人があじさいを見に行くことを知った（もしくは思い出した）順子の父親が「それなら瑞泉寺がいい」という意見を述べたのが㉔である。「見るなら」は「見るの（ん）なら」でもよい。あまり意味を変えないパリエーションとして

㉔' 「あじさいを見るんだったら……」

㉔'' 「あじさいなら……」

㉔''' 「あじさいだったら……」

などがある。

㉔の「なら」の用法については、26～27ページですでに述べたように、前件において後件のための前提を「仮定」したり「想定」したりする必要がない。映画のこの場面でも、話し手にとって、娘とその友達があじさいを見に行くことは明らかだからである。

「瑞泉寺がいいですね」も、意見を言うというよりは、確認や共感という性格のものかもしれないが、台詞の調子からは断定できない。

㉔は、順子が自分の父親を誘う台詞。ここで使われている「たら」は、すでに確認した用法(2)の用例だが、「(もし)よければ」「よろしかったら」「よろしければ」などと共に、勧誘・依頼などの前置きとして用いられる定型表現としてしっかり身につけさせたいものである。(31～32ページ参照)

㉔の最初の「ああ」は、台詞の調子から判断する限り、肯定の返事というよりは考えるときに発する時間かせぎの「ああ」のようである。続く「瑞泉寺へ行くなら、いっしょに行きましょうか。」で「なら」が使われているが、この「なら」は先に見た前件に仮定性のない用法である。(26ページ参照)

すなわち、⑥の発話以前に順子と春子が瑞泉寺へ行くことは確定している。⑥は、それを受けて「それじゃあ」と自分の気持を述べているに過ぎず、「瑞泉寺へ行く(の)なら、いっしょに行く」「瑞泉寺へ行かない(の)なら、いっしょに行かない」というような論理的関係はない。文末の「……行きましようか」は、他からの誘いに対する同意の表現であるが、「か」が添えられているだけ「遠慮」や「ためらい」が含まれ、ややひかえ目な同意となっている。しかし、ここでの音調、話し手の表情は微妙である。二人に同意を告げているようでもあり、二人に意見を求めているようでもある。

いずれにせよ、その反応は順子と春子にとって好ましいものであり、④で順子が「わあ。」と喜びの声を上げ、ほぼ同時に春子が「ぜひ一緒にお願います」というような気持で「⑤はい。」と応える。こうして順子の父親も加わり三人で瑞泉寺へ行くことになったところで、順子の家での場面(Ⅲ)は終わる。

IV 瑞泉寺へ行く道で(⑥～⑭)

画面が替わって緑の多い明るい道。瑞泉寺へ向かってゆっくり歩く三人。この場面での会話は以下のとおりである。

順子「⑥いいお天気ねえ。」

春子「⑦うん、よかった。」

父「⑧ああ、順子。」

⑨瑞泉寺へ行くなら、こっちの道が近いよ。」

順子「⑩あつ、そうね。」

父「⑪このあたりは、夏になると大勢の人が来ます。」

順子「⑫近ごろは、車も多いのよ。」

父「⑬東京から遊びに来るなら、この辺は近いですからね。」

春子「⑭わあ、きれいね。」

順子「⑮この花の名前、知っている？」

春子「⑯知らないわ。」

⑦「なんていう花かしら。」

順子「⑦ざくろよ。」

⑧「この辺にはたくさんあるの。」

春子「⑧そう。」

⑨「いい花ね。」

父「⑨つゆのころになると、よく見る花ですよ。」

父「⑩もう少し行くと、瑞泉寺です。」

⑪「あそこにあじさいはきれいですよ。」

⑩の文末の「……ねえ」は、相手の同意・共感を求める表現だが、その音調により（特にひとりごとの発音した場合など）感嘆の表現になることは、すでに④⑤で触れた。（36～37ページ）

⑦では「うん」の「聞こえ」に注意させたい。しかし要は、順子の⑦に共感した春子の気持が理解できればよいわけで、はっきり「ウン」と聞こえないという学習者の心配は無用である。ここでの「よかった」は、「雨が続く梅雨どきなのに、今日は晴れてよかった」といった気持からであろう。

そこへ、少しうしろを歩いていた順子の父親が声をかける。それが⑩であり、それに続く⑪は、振り返って立ち止まった順子に、右手で画面左方を指さしながら発する台詞である。この⑩では、学習項目のひとつ「なら」が使われているが、「なら」の用法についてはすでに確認した。（p. 26～27参照）ここでの「瑞泉寺へ行くなら、……」は、「瑞泉寺へ行くこと」は明らかであり、それを仮定したり想定したりするわけではなく、⑩などと同じく「主題確認」とでもいうべき用法である。

「こっちの道」の「道」は、画面上、順子の父親が指さした時点ではあまりはっきりしていないが、それに続く反対側から映したショットでは、画面右に三人が歩く上り勾配になった道が見え、理解しやすい。

なお、⑩では、順子の父親の台詞のスピーチ・レベルに注意させておきたい。というのは、この話し手が「⑫よくいらっしやいました」「⑬……にな

[74] 近ごろは、正月に着物を着る人が少なくなりましたね。

と言えば、映画の㉔と同じように「数年前と違って」のような意味になる。

㉔の「東京から遊びに来るなら、この辺は近いですからね。」は、㉑の「大勢人が来る」、㉒の「車も多い」に、その理由として添えられたような台詞である。ここでまた学習項目のひとつ「なら」が使われているが、先に触れたように、その用法を限定するのは難しく思われる。この文は前件と後件の強い論理的関係を強調しているわけでない。話し手の頭の中には、「夏場この辺に遊びに来る人は東京の人が多い」、「車も東京ナンバーが多い」など、の経験的前提があるのであろう。その前件の仮定性の希薄であることを考えれば、㉑ ㉒に続く会話の流れから「㉓東京からは、近いですからね。」などの台詞であってもおかしくない。また、「……からね。」という文末の形に注目しても、この発話は「東京からたくさんの人が遊びに来る」という事実に説明を与えるという性格が強く、「東京から来るなら」は東京以外の所から来るなら」という条件そのものを問題にしているわけでないことが理解される。このように考えた場合には、26ページの「用法(2)」（「前提（主題）確認」）に含めることができよう。

なお、同じ話し手が同じ場面で㉕では、「このあたり」、㉖では「この辺」を用いている。指導のための準備としてその相違をおさえておくのはよいことだが、学習者から質問が出ないのにここで問題にするほどの重要度はなかろう。若い人々の軽い調子の話しことばでは「この辺」が支配的であるように思われる。

「㉗ああ、きれいね。」は、春子が何かに目を止め歩みをゆるめつつ発する台詞。そこで三人が立ち止まり、同じショットで順子の㉘、春子の㉙と続くが、ここまでは、話題について映像の十分な情報はないわけで、学習者の聴解力が試される。特殊な見せ方としては、台詞㉙の途中で画面を静止させてしまい、「二人は何について話しているのだろう」と問いかけることにより、学習者の理解を確認することが可能であろう。たとえ単語としての「花」がうまく聞きとれなくても、その場面（道の両側に見える塀、垣根、草木な

ど)から、㉔の「きれいなね」と話し手の目線などをヒントに「花についてだろう」と推測できる学習者は、カン(「場面解釈力」)の良さという点で評価されるべきであろう。

「特殊な見せ方」と断ったが、普通にこの映画を見る場合には、すぐ次の㉗でざくろがUPになり、そのショットの音声として春子の「なんていう花かしら。」そして順子の「㉘ざくろよ。」と続き、日本語が全く分からない外国人にさえ、何について話しているのかは理解される。これが自然な言語生活の実際なのだが、訓練のためにはあえて映像を除いたりする形で練習することも必要であろう。進んだ段階での聴解練習のための素材としては、映像としての場面依存度の低いラジオドラマやニュース解説、講義などが有効になる。面と向かって話すことやテレビドラマなどの理解に自信を持っている学習者には、可視的要素を主な手掛りとする「場面解釈力」が十分に活かさない電話での会話をひとつの課題として与え、より高い目標への動機づけを行ったりすることも大切である。

㉙ ㉚では「……知っている?」「知らないわ」のスピーチレベルに注意させ、練習に際しては「……知っている?」の応答として*「知らない」などの誤りを見逃がさないようにしたい。

㉗では、「なんていう」が「なんという」のより話しことば的なくだけた形式であること、文末の表現「……かしら」が、ここでのように質問文のやわらげとして用いられることを理解させたい。「かしら」についてはすでに台詞㉕のところで触れた。(p.18参照)

なお、㉗ ㉘では画面にざくろがUPで映し出される。葉の緑と赤味がかったオレンジ色のの花の色があざやかである。

㉙ ㉚ ㉛は、順子と春子の二人の顔のショット。ここでの台詞は難しくない。

㉜は父親の顔のUP。「つゆのころになると、……」で、学習項目のひとつ「と」がまた現れるが、この用法はすでに何度も出たので、学習者が「つゆのころになると毎年(きまって)……」というようなニュアンスを補って

意味をとることもさほど難しくはなからう。(p.20参照) むしろ㉔では、文の構造に注意させたい。「よく見る花」という連体修飾部分を内包した㉔'「これは、つゆの頃になるとよく見る花ですよ。」という構造をしっかりと理解させる必要がある。なお、「つゆのころになると」の「になる」については、同じ映画(基礎篇)の第15巻「うつくしいさらになりました」で学習している。「夜になります」「朝になります」などと同じ用法である。

ショットが替わり、三人がまた歩き出したところでの父親の台詞が「㉔もう少し行くと、瑞泉寺です。」である。この「と」の用法も新しいものではない。㉔も問題はないが、ここでの「あそこ」の使い方を確認しておくとうい。この「あそこ」は、話し手・聞き手のいずれもが身を置いていない場所で、両者がトピックとして共有できる場所を示すということを理解させなければならない。すなわちここでは、話し手も聞き手もまだ瑞泉寺に至っていない。そして、瑞泉寺という場所について話は幾度となく繰り返されており、すでに共有できる話題として確立していると考えられるからである。しかし、「あそこ」「そこ」、「あれ」「それ」、「あの人」「その人」などのこの種の用法は外国人学習者にとって容易ではなく、異なった場面を吟味し整理した補助教材を使うなどして、別に体系的な指導を行うことが望ましいと思う。

ここで場面IVは終わるが、㉔から㉔までの会話の話題になった花、ざくろについて触れておこう。

【ざくろ】 落葉小高木。現産地はインドの北西部からペルシャにかけての地域。秋に熟す実は食べられるが、日本では果樹として栽培されているわけではなく、庭園の花木、盆栽として植えられ、果実は副産物として利用されている程度にすぎない。

教室で詳しく取り上げる必要のないことはいうまでもないが、口頭で説明するよりは、分かりやすい写真などを用意することが肝要である。

V 瑞泉寺で (85~97)

画面が替わって三人が山門をくぐって入ってくるショット。ここで、三人がいよいよ瑞泉寺へ着いたことが示される。以下、この場面すなわち瑞泉寺での会話である。

春子「85 やっと着いたわね。」

順子「86 来てよかったわね。」

春子「87 うん。」

順子「88 わあ、きれいだ。」

春子「89 そうね。」

父「90 あそこに登れば、海が見えますよ。」

順子「91 富士山も見えるかしら。」

父「92 見えるといいね。」

順子「93 ええ。」

父「94 冬なら、よく見えるんだが……。」

順子「95 ああ、富士山が見える。」

春子「96 ほんとう。」

97 うっすらと見えるわね。」

85 86 87は瑞泉寺に着いて境内に入る三人を内側から映したやや遠目のショットである。

85では「やっと」の意味・用法について確認しておくといよい。これは語彙の指導に際して常に留意すべきことであるが、最終的に教える表現は「やっと」だけであっても、指導のための準備の段階では「ようやく」「とうとう」「ついに」「結局」なども考え合わせ、適切な用例を整理・吟味しつつ指導すべき語の意味・用法上の特徴をおさえるようにすることが大切である。たまたま思い浮かんだ用例だけから「話し手の苦労」を強調し過ぎたりすると「やっと梅雨が明けましたね。」などをうまく理解させるのが難しくなる。また、映画のこの場面で、仮に春子が「85 やっと着いたわね。」の代わりにに

㊦「ようやく着いたわね。」㊧「とうとう着いたわね。」㊨「'''ついに着いたわね。」㊩「'''結局着いたわね。」などと言ったとした場合の適不適、意味・ニュアンスの違いについて考えてみることは、教える側の勉強として大いに意味があろう。

なお㊦では、その直前に春子と順子が発した安堵感を表す感動詞が観察される。それに着目させることは、上に見た「やっ」との意味把握のためにも役に立つだろう。

㊨の「来てよかったわね。」はやさしそうで実は難しい。その場面から、落ちついた瑞泉寺境内の雰囲気に触れた順子が「来たこと」をプラスに評価し、喜んでいるということが理解できればそれだけで済ますこともできる。参考として、

[75] 風邪がなおってよかったですね。(相手)

[76] あーあ、間に合ってよかった。(自分)

[77] 梅雨が明けてよかったですね。(自然)

なども考えるとよい。

なお、述部に「た」の形を含む㊨の「来てよかった」という表現は、先へ行って、「来ればよかった」「来たたらよかった」などと関連し、学習者の興味をそそることになる。

ショットが替わり、あじさいの花のUP。そこで順子と春子が、それぞれ「㊨わあ、きれいだ。」「㊩そうね。」という感嘆の声をあげることで、二人が美しく咲くあじさいの前にやって来たことが示される。

次の画面。順子の父親が手をあげて画面左側を指さし台詞㊰を発すると同時にショットが替わり、緑の茂る小山（小さな森のようにも見えるが）が映る。これで、映画を見ることに慣れている学習者には、それが指^さされた方向の景色なのだ^と理解される。

さてここで、「㊰あそこに登れば、海が見えますよ。」というように、学習項目のひとつ「ば」が現れるのだが、ここでの「ば」はすでに見た㊰ ㊱ ㊲などと異なり、「と」「たら」で置き換えることの可能な、必然的・習慣的帰

結を表す用法であることに注意したい。(p. 14参照)

その小山の上から、海は必ず見えるのだが、富士山は季節・天候等によって見えたり見えなかったりすることを経験として知っている順子が、「今日はどうかな」るいう気持から自らの疑問として(半ば父親に投げかけつつ)発した台詞が「㉔富士山も見えるかしら。」である。(文末の「……かしら」については、すでに㉑と㉗のところで簡単に触れた。)

㉒の「見えるといいね。」はそれに対する父親ま反応である。ここの「と」は、先に述べたように条件の表現として扱わず「……といい」という慣用的な表現として指導したほうがよい。(p. 8~10参照)すでに現れた、

㉓ 早くつゆが終わるといいな。

㉔ こんな色が自由に出せたら、すばらしいわ。

などの外に、初・中級で扱われる慣用的表現として、

[78] 私、そろそろ帰らなければなりません。

[79] もうお帰りにならなければいけないんですか。

[80] もう少しゆっくりしていらしたらいかがですか。

[81] 今晚泊まって、明日の朝帰ればいいのに。

[82] じゃあ、せめてもう一杯だけ飲んでいたら。

などが考えられる。日常の言語生活に頻繁に現れる表現だけに、文法項目の提出順などにあまりとらわれずに、適切な場面とともに提出し、早目に身につけさせたいものである。

画面は替わり、小山の方へ向かって歩く三人の後姿のショット。そこで父親の声で「㉕冬なら、よく見えるんだが……。」この台詞の理解として「今は冬じゃないから、どうかなあ……見えないかもしれないなあ……」といったニュアンスがつかめることが大切である。「なら」そのものの用例としては、26ページの(1)に含めてよいが、問題は文末の表現までを含めた発話の表現意図である。すなわち「XならY(ん)だが……。」という形で、実は「XでないからYは期待できないのでは……」というニュアンスを表現することにおらいがあるわけで、学習者にもこの点を十分理解させる必要があろう。

これは、「なら」に限らず、

[83] もう少しお金があれば、新幹線で行くんだけどなあ……。

[84] あなたがいたら、もっと楽しかったのに……。

[85] もう少しやさしいと、僕にも読めるんだけどな。

などの例を考えることができ、先の慣用的表現との関わりもでてくる。(p. 50参照)

画面が替わり、三人が登ってくるところをやや上から捕えたショットで、時間の経過が示される。順子の「㉕ああ、富士山が見える。」を春子が「㉖ほんとう。」と受け、ショットが富士山の遠景に替わり、音声として春子の「㉗うっすらと見えるわね。」が重なり、画面いっぱいの富士山でこの映画は終わる。なお、㉕は、「ああ、見える。」と「富士山」を落としてもよいが、(シナリオで㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝と続けて読むとなおさらそう感じられるのだが)㉜と㉝のショットの切り替え、すなわち時間の経過を考えれば、やはり「㉕ああ、富士山が見える。」も十分に自然な台詞であることが理解されよう。

3. この映画の学習項目の整理

この映画では、条件の表現として「と」「ば」「たら」「なら」の基本的な意味・用法を取り上げようとしたが、映画に即してきてきたように、そのひとつひとつの意味・用法を簡潔に整理・説明するのはなかなか困難である。むしろ、多少のニュアンスの差を伴いながら、用法が重なり合う場合も多く、また用法の適切性が微妙に問題になったりするのである。また、「と」「ば」「たら」「なら」の典型的な用法と一般に考えられるものを十分に、適切に映画に盛り込むというのも、なかなか困難である。

「と」「ば」「たら」「なら」を含む文は、言うまでもなく前件と後件からなる複文であり、前件＝条件、後件＝帰結といった意味的關係を示すとき、それらは条件の表現ということになるが、条件という枠をどうとらえるかは、なかなか難しい。2.2.でもふれたように「と」「ば」「たら」「なら」は、

狭い意味での条件の表現を越えて、その用法を考えていかななくてはならない面がある。

したがって、「と」「ば」「たら」「なら」も含め複文全体の問題を一度簡単に眺めておく必要がある。この日本語教育映画30巻の中で複文を中心的な学習主題にしたものはこの映画を含め4巻ある。ひとつは「て」の用法を扱った11課「きようは あめが ふっています」であり、もうひとつは「から」「ので」を主に扱った19課「てんきがいいから さんぽをしましょう」であり、さらに「ても」「のに」「けれど」等を扱った23課「いえが たくさんあるのに とてもしずかです」である。

これらの学習の中では、複文における前件と後件がどういう関係で成立するか、つまり、ふたつの(単)文(あるいは、それ相当のもの)の構文上、意味上の結びつき方が大きく問題となる。当然、文を構成する各成分間の関係も緊密、複雑になるから、文としての適切性の判断も微妙になったりする。文はまた、言うまでもなく談話の中での適切性を問われる。複文の問題は、学習者の豊かな言語表現・理解を考えれば通らなくてはならない道であるが、条件の表現としてここで扱ったものはその中でも学習上、教育上、なかなか複雑な問題を抱えたひとつの段階である。

ここでは、まず複文の問題を概観し、複文の前件と後件をつなぐ成分である接続助詞(等)の問題にも簡単にふれ、その中で条件の表現を考えることにする。その上で、「と」「ば」「たら」「なら」の個々の意味・用法を眺め、そして日本語教育上の観点からも簡単に言及してみたいと思う。

3.1. 複文の問題と条件の表現

複文に言及した文献はいろいろあるが、ここでは日本語教育に関連したものということで『日本語の文法(下)』(寺村秀夫, 1981, 国立国語研究所)を取り上げることにし、ざっと概観してみる。

まず、寺村の論で複文としてとらえる範囲だが、これは当然、文とは何かという、文の認定にまで及ぶ問題である。寺村は(単)文を「それ全体が一

つのとまった叙述内容を表している」と認められるもの」として、それが「そこで言い切りにならず、いくつかつながっているものを『複文』と呼ぶことにする」としている。そうして実際の文に即して単文、複文の問題に言及してから複文を「接続の形式的分類」「構文的分類」「意味的分類」の観点から考察している。

ここで、寺村の意味的分類を簡単に眺めてみると、寺村の場合、「一応まとまった叙述内容をもったものが文の一部となっているもの」を「節」と呼ぶが、その節の関係は次の表1.のように整理されている。

表1. 節と節の意味的關係

- | | | | |
|---|------------------|---|---|
| { | 1. 並列的關係 (継起を含む) | { | 1. 述語 (ないし節全体) を修飾・限定する |
| | 2. 主從的關係 | | { <ul style="list-style-type: none"> 1. 時・前後關係 2. 原因・理由 3. 仮定・条件 4. 程度 5. 述語の内容 (「引用」) |
| | | | 2. 名詞を修飾・限定する |
| | | | { <ul style="list-style-type: none"> 1. 付加情動的 2. 内容説明的 |
| | | | 3. 從節自体が名詞となる |

条件の表現は、この表のうち2.1.の型に含まれるものであり、そのうちの2.1.3.「仮定・条件」に関連すると考えられるが、それは「時・前後關係」「原因・理由」「程度」などと関連して位置づけられている。そうしてこの「時・前後關係」の表現は特に、「並列的關係」の表現とされた1.との関連が考えられるし、また「原因・理由」の表現や「仮定・条件」の表現のあるものも1.と関連するところがあるから、結局、節と節との意味的關係から複文を眺めるということは、いろいろな表現形式の間の意味的連続性とその相違を問うことになる。

以上のような複文全体の問題の中で、条件の表現をどう定義づけるかは、論者によっていろいろと異なっている。条件のとらえ方に広狭があるのであ

る。ここでは、先の論に関連して寺村の場合、そして条件を広くとらえている『日本語教育事典』(1982, 大修館)の場合を簡単にみてみよう。

先の表1. では、寺村は『仮定・条件』という項目を設けていることを目にしたが、寺村は同じ論の中で条件表現を論じるにあたって、まず B.Bloch の説を紹介しながら条件について考察している。そして寺村によれば、「条件」「仮定」等は、「ある非現実の事態(P)の実現が、他のやはり非現実の事態(Q)をひきおこす引き金になるということを手が述べようとする表現」ということになる。この非現実の事態とは、(1)時間の経過によって自然に実現する、(2)実際に未来に実現するかどうか分からない、(3)はつきり現実と反する、ということもあるとしている。

寺村は、これらを「条件」と呼ぶのは「便宜上」と断わっているが、ついでに寺村の論にも近く、また新しい観点も加え、「性質の違、三種類の条件表現を分ける」と主張する周馥卿(1983)の論に簡単にふれたい。周は「陳述態度の枠組」の設定のもとに条件表現を論じ、その結果、「描写」、「仮定条件表現」、「前提条件表現」の三種類に条件表現を分ける。

「描写」は、「時間的關係を現わす描写・叙述」であり、寺村のいう(1)に近いと思われる。「仮定的条件表現」は、前件も後件も「言語主体によって想定された事柄」とされるから、寺村の(2)(3)が含まれることにならうか。「前提条件表現」は、前件が「文脈による情報でなければならない」ものであり、後件は「言語主体の判断・意志の叙述」をするものである。したがって、一番狭く「条件」を解釈すれば、周の言う仮定的条件表現を「条件」とすることもできる。

『日本語教育事典』では、条件は「接続の表現」の中に入れられている。この接続の表現は、まず「対等の接続」と「条件の接続」に二大別されていて、後者をみると「前件と後件の二つの事柄のうち、その前提となるものを条件と呼ぶ」として、「から」「たら」を含む文が例にあげられている。これは寺村や周の論より広い範囲のものを含む取り扱いである。

「仮定の条件」は「確定の条件」との対比で条件の接続の中の下位分類と

なり、それはまた「特定の場の仮定」と「一般の場の仮定」のふたつに分かれる。

以上のように条件という語のとらえ方に幅があるのは、日本語文法にそれが十分組み込まれていないからであり、それは条件節（等）を作る成分をどう取り扱うかがなかなか困難であるということに密接につながっている。そこで、次に主に日本語教育や国語教育との関連の中で条件の表現を論じた人たちがどういう成分（＝語項目）を論の対象にしているか、簡単にみてみたい。

まず、日本語教育の立場からみると、目にした範囲では、古くは、北条淳子（1964）、新しいものでは、川口さち子（1984）や豊田豊子（1985）がある。北条や川口では「条件」という言葉がタイトルに使われていて、「と」「ば」「たら」「なら」が考察の対象に含まれ、豊田では「と」「ば」「たら」「なら」がタイトルに使われている。永野賢（1975）や、小野米一他（1983）、先にふれた周夔卿（1983）も「と」「ば」「たら」「なら」をいっしょに論じている。国立国語研究所（1964）にも条件の表現の考察があり、そのうち〔一〕に「と」「ば」「たら」「なら」が含まれている。

したがって、条件の表現という範囲に一応、「と」「ば」「たら」「なら」を含めて考えることができそうであるが、意味範囲にこだわるか、取り上げる語形にこだわるか、あるいは考察の対象をどうしぼるか、などで論者の立場が多少とも異なってもくる。上記北条では「だたら」「んなら」「んだたら」（傍点筆者）が考察の対象に入っているし、また上記国語研では条件の表現〔二〕で「なら」と「ならば」の異同を取り上げている。

ついでながら、国語研の条件の表現〔三〕には、「ても」「とも」の考察があり、結局条件の範囲は順接、逆接を含む広いものとなっている。先の『日本語教育事典』の「条件の接続」の取り扱いはこれに近いもので、条件の接続はまず「順接条件」「逆接条件」に二分されていた。そのそれぞれに「仮定の条件」が含まれるというかっこうである。

森田良行（1967）も条件を広くとらえていて、「と」「ば」「なら（ば）」

「たら(ば)」に「ても」「とも」「から」「ので」「けれど(も)」「が」「のに」が加わっている。また、鈴木重幸(1972)は、「なら」を二分した「するなら」「したなら」に「と」「ば」「たら」を加えた五つを条件の形として取り上げ、さらに逆条件の形として「ても」「たって」を取り上げている。

「と」をはずし、「ば」「たら」「なら」を問題にしたのは遠藤織枝(1978)で、「と」については『と』も類義語として比較されることが多い」が、「と」の発生を考察すると『ば』『たら』『なら』との相違は明らか」としている。逆に「なら」をはずし、「と」「ば」「たら」を考察の対象にしたものに小出慶一他(1981)がある。小出は「なら」を条件接続詞としながら「他の三者とは、かなり性格を異にする」と扱わなかった理由を述べている。遠藤、小出では条件のとらえ方に力点の置き方の相違が表われているが、確かに「と」と「なら」だけを並べてみると両者の異質性はかなり目立つのである。

ほかに「と」「ば」「たら」だけを扱ったものは、宮島達夫(1964)があるが、これは考察の対象をしぼったものと考えてよく、また久野暉(1973)では「副詞節」を論じる中に「と」「たら」「なら」を取り上げ、「ば」をはずしているが、これも考察の対象をしぼったものである。

先の寺村秀夫の論を見てみると、「と」「ば」「たら」に「とき」を加えていて、「なら」は別の扱いとなっている。寺村では「時の限定」が一方で大きく問題になっているから、「とき」が加わっているわけで、したがって別扱いの「なら」でも「したなら」や「～のなら」に言及している。なお、寺村では逆接の言い方には全くふれていないので、それが条件の枠の中に入るのかどうかは、はっきりしない。

他に、個々の語項目を解説したものには、先の『日本語教育事典』、森田良行(1980, 1984)、国立国語研究所(1951)、また松村明編(1969, 1971)等がある。

3.2. 接続助詞の分類と条件の表現

今度は、複文における前件と後件をつなぐ成分であるところから、接続助詞とされるものの全体を概観し、その中で条件（また、それと同類のもの）がどんな位置をしめるか、簡単にみしてみる。

『国語学大辞典』（1980，東京堂）で「接続助詞」の項を引くと、「意味的分類」の説明に次のような表（表2.）が出ている。ここでは、接続助詞の意味的分類として条件、非条件が一方の枠組を決め、それと順接、逆接が組み合わされている。「と」「ば」は、この条件、順接の中に分類され、条件の下位分類である仮定か、確定かが問われるわけである。「なら」「たら」は、「ば」と同じところに分類されている。

表2. 接続助詞の意味的分類

		＜順接＞	＜逆接＞
{	条件	① 仮定 風が吹けば雨が降る	風が吹いても雨は降る
		② 確定 風が吹くと雨が降る	風が吹くのに雨が降る
{	非条件	③ 並置 風も吹くし雨も降る	風も吹くけれども雨も降る
		④ その他	

ここで順接とは、前件と後件との関係が当然至当のもの、逆接とは、前件と後件が相応しないもの、また、仮定とは「前件が仮定の事実を表わすもの」、確定とは、前件が「既定の事実を表すもの」というふうにあらく考えておく。以上の説明は、「接続助詞」の場合と同じく、上記『国語学大辞典』により、「接続」の項を参照したものである。以上の論をもう少しわしくみるために、田中章夫（1977）における接続助詞の用法を取り上げてみたい。田中の説明の枠組は、次のように整理できる。

- (1) 時間的な関係を表わす接続助詞
 - a. 同時に並行する事象の接続……「ナガラ」、「ツツ」
 - b. 時間的に継起する事象を接続……「テ」、「ト」、「タラ」
- (2) 因果関係を表わす接続助詞
 - a. 代表的なもの……「ノデ」「カラ」

- b. 立論の根拠を表わす……「モノデ」「タメニ」「ユエニ」など
- c. 「前件をきっかけとして後件の結果が生ずる」といった関係の接続
……「トコロガ」
- d. 理由や根拠を提示する……「シ」
- e. 不確実な理由を示す……「セイカ」
- (3) 定常的關係を表わす接続助詞（確定の接続）
 - a. 必然的な論理關係を表わす……「テ」, 「デ」, 「ニ」
 - b. 恒常的な關係を表わす……「ト」, 「バ」
- (4) 不確定な關係を表わす接続助詞
 - a. 確定しない事象を前件とする接続表現（広く「假定」）……「タラ」,
「ナラ」, （「ト」, 「バ」）
 - b. 逆説めいた假定を表わす……「テモ」, 「トモ」, 「タツテ」, 「モ」,
「ニ」, 「ガ」, 「トコロガ」「トコロデ」
- (5) 背反的關係を表わす接続助詞……「ガ」, 「ケレドモ」（「ケレド・ケ
ドモ・ケド」）, 「ノニ」「ニ」, 「モノノ」, 「モノヲ」, 「クセニ」, 「ト
コロガ」, 「トコロデ」, 「ドコロカ」 cf. 「ナガラ」, 「ツツ」

「と」「ば」「たら」「なら」に関する説明を拾い出してみると次のようである。

- ◎ 「と」……時間的に継起する事象を接続 cf. 「て」「たら」
定常的・恒常的な關係を表わす cf. 「ば」
- ◎ 「ば」……定常的, 恒常的な關係を表わす cf. 「と」
- ◎ 「たら」……時間的に継起する事象を接続 cf. 「て」「と」
確定しない事象を前件とする cf. 「なら」（「と」「ば」）
- ◎ 「なら」……確定しない事象を前件とする cf. 「たら」（「と」「ば」）

この田中の論と『国語学大辞典』の「接続助詞」の説明と重ね合せてみると、「と」は非条件で並置の「て」の用法に近いところがあり、また条件といっても「定常的, 恒常的」確定を表していることになる。条件, 假定の「ば」は、「定常的, 恒常的」確定の「と」に関連し、「確定しない事象を前

件とする」仮定の「たら」「なら」に関連する。また、条件、仮定の「たら」は、時間的継起の表現にも関連するところのある用法の広い語であり、「なら」はもっぱら条件、仮定を表すということになりそうである。ただ、つけ加えると「なら」は、先の周の論における「前提条件表現」、つまり、前提が「文脈による情報でなければならない」ものに重なる部分が多い。

こうしてみると、「と」「ば」「たら」「なら」それぞれが持つ用法の広がり全体をある種の枠組の中に簡単におさめることは、容易でないことがわかる。たとえば、言語学研究会・構文グループ(1985)は、「と」「たら」を「基本的には、条件を表現していない」とするのである。というのは、条件とは、前件に「さしだされる出来事」が、後件の「出来事の実現にとって、必要な」ものでなければならず、「と」「たら」はこの点で「ふたつの出来事のあいだの時間的な継起性を表現していて、条件的ではない」からである。こうした立場も特別、独特なものではなく、たとえば上の田中の論の解釈の仕方しだいでは、そうも言えるということになる。

なお、上の『国語学大辞典』、田中章夫では「たら」「なら」は接続助詞の中に組み込まれていたが、「たら」は助動詞「た」の活用的一种、「なら」は「だ」の活用的一种とする取り扱いがまだ一般的と思われる。ただその場合、動詞等に接続する「なら」についてどう考えるか、などの問題が残る。

以上、複文と条件の表現の関係、また接続助詞(等)の中における「と」「ば」「たら」「なら」の位置を簡単にみてきた。

3.3. 「と」「ば」「たら」「なら」が承ける形

「と」「ば」「たら」「なら」の解説に入る前に、まずそれぞれの前件における接続の形にふれておく。前件における述部部分は、動詞、形容詞、形容動詞、名詞(文)(「病気だ」の形)の4種である。

「と」の場合、動詞、形容詞、形容動詞の終止形、及び名詞文の基本形(「病気だ」の形)に付く。述部部分が「～た」の過去の形になることはな

い。

「ば」の場合は、学校文法では活用的一种として仮定形が設定されていて、動詞、形容詞については、「行け+ば」「暑けれ+ば」のようになる。動詞は、したがって当然その活用の種類に従うことになる。これは「~たら」の場合も同様である。形容動詞の仮定形は、たとえば「静かだ」の場合、「静かなら」とされ、名詞文における助動詞の「だ」も「なら」とされ、たとえば「病気だ」は「病気なら」という形になる。これが「ば」に続くという理屈になるが、これは「静かであれば」「病気であれば」に相当するものと考えことにする。

「たら」も助動詞「た」の活用的一种とみる学校文法の場合、「ば」に続く形ということになるが、「ば」を伴わない形のままここでは取り扱う。接続の形は、動詞、形容詞、形容動詞、名詞文の過去形、つまり「~た」の形が「~たら」となる。

「なら」については、先にふれたように形容動詞、名詞文では「静かなら」「病気なら」という形であるが、動詞、形容詞ではその終止形につく。また、動詞、形容詞、形容動詞、名詞文、それぞれの過去形につく。ただ、この「~たなら」については、「日常語としてはもはやあまり使われないうのだ」と寺村(1981)は指摘している。以上を表に整理して代表形を示す。

	~と	~ば	~たら	~なら
動詞	行く	行け	行っ	行く/行った
形容詞	暑い	暑けれ	暑かつ	暑い/暑かった
形容動詞	静かだ	静かだ	静かだっ	静か/静かだった
名詞文	病気だ	病気だ	病気だっ	病気/病気だった
	と	ば	たら	なら

「なら」にはほかに、「~するの(ん)なら」「~したの(ん)なら」のように「~の(ん)なら」の形もある。

述部部分は、それぞれ否定の形もとる。否定形は「ない」を伴って形容詞型の活用になるから、「~ない+と」「~なけれ+ば」「~なかつ+たら」「~

ない+なら/～なかった+なら」のようになる。話しことばでは、述部部分に「です」「ます」が加わることも多いと思われるが、「です」には仮定形がなく、「ます」の仮定形「ますれ」は使われることが少ないとしてよい。

3.4. 「と」「ば」「たら」「なら」について

2.2.の映画場面、表現についての解説の中で「と」については20～21ページで、「ば」については14ページで、「たら」については30～32ページで、「なら」については26～27ページでふれた。そこでの説明や、先にふれた田中章夫等の論をもとに、まず、この映画の題名を例に取り上げて、その用法上の差について簡単に考えてみたい。映画の題名の前件の述語部分に「と」「ば」「たら」「なら」を加えて表現すると、次のようである。

[86] あそこに $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 登ると} \\ \text{b. 登れば} \\ \text{c. 登ったら} \\ \text{d. 登るなら} \end{array} \right\}$, 海が見えます

[86 a] あそこに登ると、海が見えます

後件の「海が見える」という状態は、前件の「あそこに登る」という行為から、一種必然的に生まれるものである。つまり、前件の行為の結果、当然のこととして後件の状態が出現するわけで、それもその場で具体的、物理的にまた時間をおかずに現れるのである。これは20ページの「と」の(2)の用法であり、またこの例の「と」は田中の言う、定常的、恒常的關係をよく表している。

[86 b] あそこに登れば、海が見えます

あそこに登れば、こうである（登らなければ、そうではない）といった一般的、論理的な説明調の伴う表現である。「登る」という条件を満たして、その結果、海が望める、ということになる。これは14ページの「ば」の(2)の用法例で、また田中の言葉を借りれば、定常的、恒常的關係を表している

が、「と」の例に比べ、時間的關係や具体性が薄い。

[86c] あそこに登ったら、海が見えます

前件の「登る」という行為の完了を伴って、そこに後件の「海が見える」状態が現れるという響きがある。つまり、前件の完了を仮定して後件を述べているわけで、31ページの「たら」の(2)の用法例と考えられるが、この例の「たら」は、先の例の「と」の持つ必然性、「ば」の持つ論理性に比べ、その場合、場合を問題にした個別性が感じられ、また「ば」よりも日常的な感じが伴う。

[86d] あそこに登るなら、海が見えます

「なら」には「と」「ば」「たら」と異質の側面がある。というのは、今までの例とは違って、[86d] はどこかすわりの悪い例文であり、日本語として不可とする立場の方が多いかもしいない。これを前件と後件を逆にして、[86d]' 海が見えるなら、あそこに登りますとすると可である。[86d]'には、前件「海が見える」という提題についての判断を仮定して、後件「登る」という意志的行為をする、というニュアンスがある。つまり、26ページの「なら」の(1)の用法であり、また田中の言う「確定しない事象を前件」としているが、その前件は他者の主張と関連するものであり、それを判断の材料にして後件で話し手の意向・立場を述べているのである。[86d] が不可であると感じられるとしたら、この前件と後件の結びつきにこうした「なら」の用法上の特徴が認め難いからであろう。

[87] あそこに登るなら、

- a. 食糧と雨具をあらかじめ用意しなさい。
- b. この杖を貸してあげますよ。
- c. こっちの道に行く方がいいですよ。
- d. もっとよく海が見えるでしょう。

[86d] は、したがって「(ここでは海が見えない。)あそこに登るなら、海が見える(と断言できる)」というように後件「海が見える」を話し手の断定を表すものとして解釈すれば成立する可能性はある。これは、次のように「登るなら」を文脈の中に置いて考えた場合と同様であろう。

[88] A:あの丘の向こうに何があるのかな。これからちよつと登ってみます。

B:ああ、あそこに登るなら、海が見えますよ。

これは、26ページの「なら」の(2)の用法であり、先の周の言う前件が「文脈による情報」の前提条件と考えられる。いずれにしろ、「なら」の導く前件は後件の意向・立場を述べるための判断、あるいは導入であり、したがって [87 a], [87 b], のように事柄の実現としては後件が先、前件が後ということがある。[86 d] もその例である。鈴木忍 (1978) は、『～たら』は完了を前提とする仮定であるのに対し、『～なら』は予定ないし意志を前提とする仮定である」と述べている。

以上、[86] a. ~ d. で、「と」「ば」「たら」「なら」の表現上のニュアンスの差を簡単にみてみた。問題はいろいろ残っていて、そのひとつは後件の述部成分における時制の問題であり、また、後件における話し手の意向や推測の表明の可・不可の問題（例：「(～たら)～てください」「(～たら)～だろう」等）である。さらに前件や後件における述部成分の素性の問題がある。たとえば、例にした [86] では前件の「登る」は動作性であり、後件の「見える」は状態性であった。この述部成分の素性と条件の表現の問題については、「ト・パ・タラ・ナラによる条件表現の分析」(川口さち子『早稲田大学語教育研究所 紀要28』, 1984) にくわしい。

3.4.1. 「と」

この映画で取り上げられた「と」の用法のひとつは、道順の説明に関するものであった。

①⑨ この道を行くと、たばこ屋さんがあります。

②⑩ 左の道に入ると、すぐ小さな橋があります。

これは先に簡単にふれた [86 a] の例と同様に考えることのできるものである。つまり、空間的、地理的にできあがった客観的な舞台を背景にした表現で、前件から後件への移行は必然的、習慣的、反復的なものである。この映画で前件を自然な時の流れに設定したものは次の例がある。

㉑ このあたりは、夏になると、大勢の人が来ます。

㉒ つゆのころになると、よく見る花です。

前件における自然な時間の推移の結果、やはり自動的に後件の動作や状態が出現するのである。

㉓ この色は、青と緑を混ぜるとできるわ。

絵の具の色を混ぜ合わせるような場合の客観的変化を言う場合にも「と」は使われる。「と」による前件と後件の結びつきは極めて緊密で、前件からただちに後件に移行するのである。寺村(1981)は、「と」は物理や化学の教科書に多く用いられる表現で、物理的、化学的变化の説明に適する、としている。こうした用法上の特徴を持つ「と」の後件には命令、依頼、勧誘、許可、希望、決意など、動作主の意向等を表す表現は現われない。ただし、推測が来ることはある。

[86 a]' あそこに登ると、海が見えるだろう。

「と」には、後件の述部の時制が過去になる用法がある。これは20ページの「と」の(1)の用法である。

[86 a]'' あそこに登ると、海が見えました。

後件が他者の動作である場合もある。

[89] 戸のすきまからのぞくと、泥棒が金庫をあけて、お金を取り出していました。

20ページでふれたように前件の動作の結果、後件の事態を発見・認知したわけで、ある目撃者によって観察された出来事を証言するような表現である。

「と」には、また前件の動作と後件の動作を接続するといった用法がある。すでにふれた、田中のいう「時間的に継起する事象を接続」するもので、これは「～て」や「～てから」の用法にも関連してくる。

[90] コーヒーを $\left. \begin{array}{l} \text{飲んで} \\ \text{飲んでから} \\ \text{飲むと} \end{array} \right\}$, 勉強します/しました。

「～て」は単に二つの動作を接続し、「～てから」が時間的前後関係を明示するのに対し、「～と」は二つの動作が引き続き起こったことを表している。

3.4.2. 「ば」

「ば」は、先に簡単にふれたように一般的に「と」に比べて論理性の強い表現であり、寺村によれば数学や論理学の本で多用されるという。また、よく言われるように社会的通念を表現した格言の類にも多い。14ページの〔23〕〔24〕〔25〕を参照のこと。

「と」「ば」の用法上の違いについては、以下のような指摘がなされている。まず、次の二つの文の意味・用法を比較検討してみる。

⑬' お客が来れば、父はとても喜びます。

⑩' 今度の日曜日、都合がよければ、私のうちに来ませんか。

⑬'は、〔86b〕の場合と同じように解釈できるものの例で、〔86b〕における「ば」が多少の意味上のニュアンスの差を別にすれば「と」におきかえられたように、⑩の例も「ば」を「と」におきかえることができる。

⑭' お客が来ると、父はとても喜びます。

一方、⑩'の例では前件は必然的でも、反復的でもなくその場合だけの個人的なものであり、ある不確実な事態を仮定しているものである。つまり、「Aであれば、Bである」が、「Aでなければ、Bではない」という意識がある。そして後件には、さらに話し手の観誘の気持が表明されている。こうした意味・用法の「ば」は、「と」におきかえられないものである。これは、14ページの「ば」の用法の(1)にあたる。

⑫' お天気がよければ、行ってみたいです。

⑮' ご迷惑でなければ、お邪魔してもいいでしょうか。

⑫'⑮'の前件も⑩'と同様に解釈でき、⑫'の後件では希望の表明が、⑮'の後件では許可を求める気持の表明がなされている。以上の例を述部索性等に注目して、川口さち子(1984)に従うと、「ば」の前件の述語が動作性の場合(⑬',〔86b〕)、後件に依頼、命令、禁止、観誘、すすめ等は来ないが、前

件の述語が状態性 (⑩', ⑫', ⑬') の場合は, そうした意向表明も可能である, ということになる。(なお, ⑬が表現上, かかえる微妙な問題については, 18ページを参照のこと)

以上は, 「ば」の基本的意味・用法だが, 川口は「ば」の考察にあたって, さらに, 既定条件(確定条件)の「ば」, 過去の習慣を表す「ば」, 非現実の仮定を表す「ば」を取り上げている。川口によれば, 既定か仮定かは「文脈によるところが多く」, 過去の習慣は「前件が起これば, 必ず後件がいつも起こった」ことを表す。

⑩' お客が来れば, 父は喜んだ。

⑫' 天気がよければ, 海まで散歩した。

非現実の仮定については, 後で簡単にふれる。

3.4.3. 「たら」

「たら」の用法の制約がゆるやかであることは, すでにふれた。また, 「と」「ば」を用いた復文と違って後件に話し手の意向等を自由に述べることができるのが大きな特徴である。[86c]の例は,

[91] あそこに登ったら,

{	海を見ませんか。
	海を見て下さい。

のように, 話し手の勧誘, 依頼等を後件に述べるのできるものである。今まで述べたようにいわば自然発生的な事象を表す「と」は, [91]の前件に用いることはできない。また, [91]の前件の述部素性は動作性であるから, 「ば」におきかえることもできない。

⑭ もう少し濃くしたかったら, この色を入れるんです。

⑮ もう少し濃くしたかたら, この色を入れてはいけません。

⑯ そんなふうにしたかたら, この筆でこうします。

⑰ そんなふうにしたかたら, この筆でこうの方がいいです。

以上の例では, 前件の述語素性が状態性であるから, 全て「ば」で言うことも可能である。

⑱ 乾いたら, その上からぬります。

この例は個別的な事象について述べたもので、「たら」は「乾く」という事象がいずれ成立した時点でというていどの時間的規定を与えているものである。これは30ページの「たら」の用法の(1-a)にあたる。このように「たら」は、前件が完了した時点で視点をおいて、後件で生起する事態について話し手の意向や立場等をさまざまに表現するものである。なお、さらにくわしく述語素性に着目しての「たら」「ば」の交換可能・不可能について興味があれば、川口の論を参照してほしい。

[92] あそこに登ったら、海が見えました。

これは31ページの「たら」の用法(1-b)にあたるもので、後件の述部に過去時制をとる場合、前件に述べる出来事が起こった結果、偶然、後件の出来事が起こったことを表す。過去に起きた二つの事象を結びつけた表現でそこにに意図的、計画的な関係はない。すでに述べたように「と」に置きかえ可能だが、「と」の方がやや客観的であり、書き言葉的である。

3.3.4. 「なら」

26~27ページで「なら」の用法にふれた際、その用法を(1)と(2)に分けた。簡単に言えば、(1)が仮定であり、(2)が提題である。先の[86d]の成立・不成立についても、こうした観点から検討した。

④' (今,)冬(である)ら、富士山がよく見えるだろう。

繰り返しになるが、「なら」による仮定とは、話し手が一方的に断定できない事柄を前件に想定するもので、後件に話し手の主体的な判断を結びつける。

⑤ 長谷川さんのお宅ら、すぐそこですよ。

「なら」を伴う前件で主題を提示し、後件でそれに対する説明を加えていく。ただ、2.2.でもたびたびふれたように「なら」が仮定か提題かの取り扱いはなかなか微妙で、判断の難しいところがある。

⑥ あじさいを見るら、瑞泉寺がいいですよ。

⑦ 瑞泉寺へ行くら、いっしょに行きましょうか。

それぞれ、「あじさいを見る」「瑞泉寺へ行く」という、他者の意向・主張

に依存していて、話し手が一方的に断定できない事柄が前件に想定されていて、後件でそれに対する話し手の判断や意向を述べていると解釈できる。しかし、㉑ ㉒を談話の流れや場面の中においてみると、㉑は「㉒あじさいを見に行きましょうよ。」という文脈を受けて「あじさいを見るなら」と展開し、㉒は「瑞泉寺へ向かって歩いている」という前提をもとに「瑞泉寺へ行くな」と主題を確認しているわけで、前件は提題、後件はそれに対する話し手の意向・立場を述べていると解釈することもできる。2.2. では、これを自然ですなかな解釈とした。いろいろと異論の予想されるところである。

「なら」の提題機能については、川口は「ナラによる条件文の本来の性格は、談話の中で、特定の『主題』を提示するということである」としている。また言語学研究会は、「なら」は「〈前提〉あるいは〈前提条件〉をいいあらわす」もので、「はなし手にとって論理の展開の前提条件なのである」としている。先にふれた周の前提条件表現における「なら」というのは、前件に「言語主体による疑いが現われない。『文脈による』と取れないからである」と説明され、仮定条件表現における「なら」は「基本的には文脈に依存していて、題目提示の性質を持っているため、(略) 使用にはかなり制約される」と説明されている。

「なら」がこうした性向を強く持つことは、「なら」を条件(仮定)の表現の立場から論じる場合にも当然反映している。久野(1973)は「なら」の用法上の特徴をいくつか指摘しているが、「なら」の前件は基本的に「聞き手(あるいは人一般)の断定」とした。それに蓮沼昭子(1985)は、「他者の意向・主張が関与しない場合」を付け加えたが、それは前件に「真の命題として設定する」ものや、「未来に実現が予定あるいは予想される」ものを見越している場合である。後者の場合には前件、後件の成立順が時間的に逆になる。

㉑ [87b] あそこに登るなら、この杖を貸してあげますよ。

以上の論を踏まえて「なら」の用法を「たら」「と」の典型的な用法と比べてみたい。まず、上の [87b] では、「たら」を用いて表現すると表現内

容が変わってくる。「たら」はすでに述べたように前件の実現を想定した表現だからである。

[87b]' あそこに登ったら、この杖を貸してあげますよ。

次のような例では「たら」の使用は不可である。

[93] 北海道へ行くなら、飛行機で行きたい。

*[93]' 北海道へ行たら、飛行機で行きたい。

「と」の典型的な用法として、自然な時の流れに前件を設定した、

⑦ このあたりは、夏になると、大勢の人が来ます。

は、生起することが疑いない事実であるので「なら」を用いることはできない。

*⑦ このあたりは、夏になるなら、大勢の人が来ます。

「なら」のその他の問題についてふれる。「～(した)なら」については、「日常語としてはもはやあまり使われない」と寺村に指摘があったが、まずそれに簡単にふれると、国語研(1964)は「～(た)なら」には「～た」が含まれているため「前件の完了を条件」としていきとし、「～(る)なら」にはそうした時間的制約はないと指摘している。先の[86d]や[87a,b]を参考にしてほしい。また、川口によると「～(た)なら」には既定の場合があり、「文脈によってどちらともとれる場合がある」としている。

⑧' 瑞泉寺へ行ったなら、(いつものように写真をたくさんとっているでしょうから)とった写真を見せて下さい。

⑧'は、既定の例であるが、川口は「後件が話者の命令や依頼」や「強い意見」であると前件は既定がふつうであると指摘している。「～(た)なら」が仮定であるのは非現実の仮定の場合である。

⑧'' 瑞泉寺へ行ったなら、いっしょに行きたかった。

なお、久野(1973)にも「～(た)なら」の用法に関する言及がある。また、「のなら」については、「～(する)のなら」であれ、「～(した)のなら」であれ、「の」の本来、持つ性格を考えれば、前件の内容に対する主題化の程度はもっと強くなっているとすることができよう。ここにも「なら」

の性向を見ることができる。

3.5. 再び条件表現について

以上、「と」「ば」「たら」「なら」の個々について簡単に述べてきたが、ここでそれぞれについて補足し、また残した問題にもふれ、しめくりとして国語研(1964)の枠組により全体を再度眺めてみたいと思う。まず、「時」と条件の関わりだが、寺村の述べているとおり、「条件の設定ということは、時の限定と重なる部分があり、またある意味で因果の関係と表裏の関係にある」ものである。

時の限定については、寺村が「と」「ば」「たら」を論じるにあたって「とき」も加えていることはすでにふれたが、その四者の表す事態の確立性について次のように二価的に表している。

	と	ば	たら	れば	と
確立した事実としての事態か	+	+	-	-	
仮想された事態か	-	+	+	+	

因果の認識は、寺村のいうP(前件)とQ(後件)の結びつきにおける必然性、偶然性の問題である。これは一方で前件の後件に対する独立性、従属性の問題で、たとえば前件の主語がそのまま後件の主語におさまるか、といったことにも関係し、また一方で寺村のいう「Q文のムード」、つまり後件における話し手の意向等の表明とも関連するが、「たら」<「ば」<「と」の順で偶然性から必然性へと度合いが高まる。一方、「なら」は、後件を述べるために設定された仮定、あるいは提題である。

以上、条件と時の限定や因果の認識の関わりを文法項目に即して見てみたが、さらに日本語の表現様式における条件表現の位置づけ、また広く文化的、社会的枠組の中でとらえた場合の用法の問題なども考えていく必要がある。たとえば、自然な時間的経過と条件表現の関わりあいだが、どのようなとらえ方に基づく表現がその文脈において適切であるかといったことがある。また、条件性を強く出す表現は、用い方しただけでは話し手の品性にまで関わる問題になる。こうした表現上の問題は、何を言おうとするか(言わな

くてはならないか)といった、表現意識の強弱と関わり、また一方で「と」「ば」「たら」「なら」の使い分けや誤用とする意識が人により微妙に違うことがあって複雑である。豊田(1985)は「と」「ば」「たら」「なら」の使い分けに関する調査を行い、「ある用法を誤りとするか正しいとするかは、同じ日本人でも個人によって非常に大きな差がある」と報告している。

「と」「ば」「たら」の文体的差については、「たら」が口語的、「ば」が文語的、「と」は中立的、また一般的にいて「ば」が衰退の方向に向かい、「たら」が多用される方向にある、といわれている。

日本語の自然な表現性については、さらに後件に状態性の言い方をとる場合の問題がある。これは、先に論じた、

[86 a] あそこに登ると、海が見えます。

がその例である。「海が見える」という状態は、動作主に知覚された状態だが、その知覚表現の部分を“you will find……”のように表現せず、その状態だけを言うのである。これについては国広哲弥(1985)を参照されたい。また、日本語における条件表現の変遷については阪倉篤義(1958)を参照されたい。

また、「なら」の談話における主題提示の機能も自然な日本語の表現性の問題として注目したい。㉗の「長谷川さんのお宅なら……」は、「お宅は」とか「お宅だったら」とも言い換えられるものである。寺村は、「なら」を「『は』その他による主題の提示」との関連で問題にしたが、三上章(1953)をもとに「『～なら』は相手による提題」という考えを紹介している。この提題を発話における導入的表現にまで広く広げていくと、すでにふれた「㉘都合がよければ」、「㉙ご迷惑でなければ」、「㉚よかったら」など、また人に道をきかれて説明するときの「〇〇でしたら」、さらに人の話を受けての「そうすると」なども、その延長にあると考えることができ、こうした表現は場面に即して社会的、文化的文脈の中で使用できなければならないものである。

ここで「と」「ば」「たら」「なら」にある種の慣用的な言い方が加わる場合、また後件の述語部分に話し手の意向や立場を表す補足成分が加わる場合

の表現について簡単にふれてみたい。「ば」には「～なければならない／いけない」のような慣用的な言い方で義務を表す表現があり、「と」「ば」「たら」に「いい」が続くと、願望、勧告、評価などを表す慣用的な表現になる。映画中には、

③ 早くつゆが終わるといいな。

④ 見えるといいね。

の二例が出ているが、ほかに「うれしい」「すばらしい」などの感情を表す形容詞をつけることもできる。これについて、国語研では「～と／ば／たらいい」の三者のうち「～といい」は「やや積極的に聞き手にある行動をすすめており」、「～ばいい」には『～ばそれですむ』という、消極的なニュアンスをともなう」とその用法上の差にふれている。

③' 早くつゆが終ればいいな。

④' 見えればいいな。

日本語教育では、ほかに「～しては／も」に「いい」「いけない」「ならない」などが続く表現が学習項目として取り上げられるのが普通である。文末に「だろう」「かもしれない」などが加わって別の意味合いをそえる場合の用例については、「と」の説明の個所で、

[86 a]' あそこに登ると、海が見えるだろう／かもしれない。

を推測の例としてあげたが、これを、

[86 a]'' あそこに登ると、海が見えるんだが／のに。

とすると、実際にはそうできないことを残念に思う、といった意味あいを表すことになる。また、「見える」を「見えた」と過去形にして、

[86 a]''' あそこに登ると、海が見えた(ものだった)。

とすると過去の一般的状态を表す。「いつも」などの副詞を用いると、それが強調される。上の例は後件の述部が状態性だが、それが動作性であると、過去の習慣を表す。

[94] 朝起きると、いつも散歩した(ものだった)。

また、

[86 a]''' あそこに登ると、海が見えただろう。

とする非現実の仮定を表すことになる。

⑬' お客が来れば、父はとても喜ぶにちがいない。

⑭' たばこ屋さんできいたら、すぐわかるはずだ。

以上は、推測の例である。

⑯ 冬なら、よく見えるんだが……。

⑰' お天気がよければ、行ってみたいのに。

⑱' 乾いたら、その上からぬるのだろうか。

以上は、事態がそうではないという不本意な気持や逡巡を表しているものである。

⑲' お客が来れば、父はいつも喜んだ。

⑳' 乾いたら、必ずその上から（色を）ぬった（ものだった）。

以上は、「いつも」や「必ず」という副詞を伴いつつ過去の習慣を表しているものである。

㉑' お天気がよければ、行ってみたいと思う。

㉒' たばこ屋さんできいたら、すぐわかったかもしれない。

㉓' あじさいを見るなら、瑞泉寺がよかったのに。

以上は非現実の仮定の例である。

最後に、国語研（1964）における「条件の表現 [-]」の論述の枠組をかりて全体を再び眺めてみたい。国語研ではデータをもとに量的な処理を加えているが、それについてはここではふれない。まず、「と」「ば」「たら」の「条件句」（=前件）を次の三つに大別している。

(1) 陳述的条件

(2) 前おき

(3) 客観的条件

(1)(2)を後まわしにして(3)をみってみる。客観的条件は、今まで問題にしてきたような前件=条件、後件=帰結を表すもので、これは次の三つに分類されている。

- (1) 結びつきの一般、個別のちがい
- (2) 既定か仮定かのちがい
- (3) 前件のおこる「時」のちがい

一般的な結びつきには、当然「既定・仮定の区別はたてられない」し、また「時」についても「超時間的なもの」と「過去」一般のものしかない。個別的な結びつきは、「前件のもとで後件のおこることが偶然的、そのほかざり」で、「既定か仮定かのちがい」と「時」については過去、現在、未来が関係する。既定とは、「前件」が「発話のとき以前に成立していたもの」であり、これには「未来」はなく、仮定とは前件が「未成立」のものであり、「時」のちがいは、過去、現在、未来、超時の四種である。以上、組み合わせて次の七種の分類を立てている。

一 般	{	……超 時	この分類により、データを分析した結果のうち、用法上の特徴的な点だけを紹介すると次のようである。	
		……過 去		
個 別	{	既 定…	◎ 一般・超時では、「たら」の少ないが目立つ。	
		{		つまり、逆にみれば「たら」はその
		過 去		
		現 在		
仮 定…	◎ 一般・超時では、「たら」の少ないが目立つ。			
{				
過 去				
現 在				
未 来				

場かぎりの個別的な用いられ方をすることになる。

- ◎ 一般・過去では、「と」が「たら」にくらべて多い。また、
「と」＝一般的な、くり返される結びつき、
「たら」＝その都度の結びつきを示す傾向、
がある。
- ◎ 個別・既定・過去では、「と」が圧倒的に多い。「ば」はあまり使われない。
「と」が多いのは、データが書きことばであるからだろう。話しことばなら「たら」は頻出すると思われる。
- ◎ 個別・既定・現在では、それほど問題がみつからない。
ただ、「ば」の場合については川口の論を参照のこと。

◎ 個別・仮定・過去（特に説明なし）

これは非現実の仮定の用法である。すでに論じた。

◎ 個別的・仮定・現在では、一般的な結びつきとの区別がややあいまいである。

◎ 個別・仮定・未来では、「と」「ば」「たら」に差が感じられない。

およそ以上のものであり、先に残した問題のうち「陳述的条件」とは『いい』『いけない』『だめだ』など評価を表す語がつづいて全体として一つの述語に近い表現をつくっているもので、これについてはすでにふれた。「前おき」は前件が「話し手のはたらきを示しているもの」で、「題目の提示」などいくつかは下位分類されているが、たとえば「換言すれば」というのは表現形式についての注釈であり、「～によれば」というのは根拠であるということになる。これは「次元のちがうものをつないでいる」ということで前おきということになるが、この前おきを広くとらえると先にふれた提題や導入的表現にとつらなっていくことになる。

以上、三種の分類とその概要にふれたが、国語研ではその分類に入る前に、「接続助詞の用法など」「文体」「慣用的な用法」は、「周辺の用法である」として最初に除いている。それにちょっとふれてみると、接続詞的用法では「すると」と「と」が接続詞になる場合、「～であろうと、～なかろうと」「～もすれば、～もする」「～ばこそ」などがあげられている。文体では文語的な言い方にふれ、慣用的な用法では「なければならぬ」「ともすれば」「そういえば」「～ば～ほど」「そしたら」「～ときたら」などをあげている。

国語研での「なら」の扱い、つまり「～（る）なら」「～（た）なら」についてはすでに簡単にふれた。この二形のほかに「～う」のつくもの（例：お伝えしようなら）の形にもふれているが、これは「やや古い文体に属するもの」としている。

以上、国語研での条件の表現の枠組をざっと見てみた。ほかに、遠藤織枝（1978）もデータをもとに論理的な枠組による処理をしている。ただ、国語研と違うのは、すでに述べたように「ば」「たら」「なら」を同列に扱い、

「と」を省いていることである。また、豊田豊子(1985)は、日本人ネイティブにおける「と」「ば」「たら」「なら」の用法上の自然感を調査している。

3.6. 日本語教育における「と」「ば」「たら」「なら」

先の川口は、「と」「ば」「たら」「なら」の各論でその意味・用法を論じるとともに個々の意味用法上にもとづく学習上の提出順序にふれ、また最後に全体を通しての提出順序の提言も行っている。全体を貫く基本的な考えは、

- I 同じ課、もしくは連続した課で教えないこと
- II 述語の素性や文体の形も合わせて教えること
- III 同じトならトでも、形や性質の違うものは離して教えること

ということであり、続いて具体的な提出順が九つの段階に分けて述べられている。川口の考えの基本には学習されるべき一冊の教科書があり、したがって「各々の提出の間には、その他の「文法項目を提出したほうが良い」といった全体を総合した提言も生まれる。初級段階では課を追って一冊の教科書を勉強するのが、いぜんとして主流であると考えられるから貴重な提言であるが、限られた学習時間との関連で「と」「ば」「たら」「なら」の用法をどの辺まで取り上げるべきなのか、またそれと関連してその他の学習項目についてはどうなのか、ということはいぜんとして難しい問題である。

初級段階でふつう扱われる「と」「ば」「たら」「なら」の用法、またその問題点については、実際の教室の経験をもとにしての藤井美知子(1982)の論がある。藤井の結論のひとつは、「だいたいのものはタラで表わせる」である。また、『日本語教育映画基礎編・教師用マニュアル5』(国立国語研究所, 1984)は、「たら」「なら」の用法の違いを知り、その両方が使えることを「最低線」として提言している。これは、たとえば、

- [95] { a. アメリカへ行たら, おみやげを買ってきてください。
b. アメリカへ行なら, おみやげを買ってきてください。

などの表現上の違いを知ることである。これについては、すでにふれた。そして次に『〜と』を『〜たら』から分離させ、「もう一步進むと全体を見渡して、その差異を知る」という過程をとる。ここには、「たら」は自由、

広範囲に用いられるから、表現上はそれぞれの細かなニュアンスにこだわることなく、「たら」を優先させようというという基本的考えがある。

「と」「ば」「たら」「なら」のそれぞれの意味・用法をある学習課程の中にきちんと折り込んで、ステップを追って学習を深めるか、あるいは、表現上使用価値の高いものを優先し、細かな差異については後まわしにするかは、学習到達目標や学習時間の制約、またさし迫った日本語による表現の必要性などが関係し、なかなかいちがいは決められないところである。

次ページに参考として、川口から「各教科書のト、バ、タラ、ナラの提出課」を引用する。さらにくわしくは、『教科書解題』(1983)も参考にしてほしい。

この映画には、教育上、学習上のよりよい効果を考えると、「と」「ば」「たら」「なら」の意味・用法を同時に取り上げたため、内容を盛り込みすぎたことは否めない。映画シリーズの全体が30巻であるという制約があっても、一方ではもっと巻数をさいて、典型的な用例をさらに多く談話の流れの中で展開し、実際的な理解をはかるべきであったとも思われる。ただ、この映画を使用するからといって、「と」「ば」「たら」「なら」の用法の学習を一挙に押し進めなければならないということはない。場合によっては、いろいろな用例を補ったりしながら、学習者の学習段階に応じた有効な利用を図ってほしい。

各教科書のト・バ・タラ・ナラの提出課

(川口さち子 (1984) から)

教科書	総課数	ト・バ・タラ・ナラの提出課				備考
		ト	バ	タラ	ナラ	
キソ (1)	50	22	31	25	31	ナラは名詞・形容動詞の語幹に接続するもののみ提出
学研 (2)	30	23	23	23	23	"
学友-日 (3)	36	29	30	30	30	"
学友-中 (4)	41	36	41	41	41	バ・タラ・ナラは「仮定」を表すとしている
ICU (5)	40	21	21	21	21	四者を“Condition”ということばで説明
J.F. (6)	34	26	32	32	32	
B.J. (7)	35	33	32	28	32	ナラについては、名詞・形容動詞の場合バがナラになるとし、動詞の場合も「んなら」の形で提出
ICJ (8)	50	29	30	30, 31	30	時を表すタラは31課で別に提出
外大 (9)	32	28	28	28	28	
長沼 (10)	50	12	28	40	25, 50	名詞につくナラは25課で、形容詞、動詞につくナラは50課で提出
早大 (12)	40	35	32	33	34	

教科書 () の番号は文献番号を示す

- (1) 海外技術者研修協会編、『日本語の基礎Ⅰ』1983改訂版、『日本語の基礎Ⅱ』1983
- (2) 学習研究社刊、『Japanese for Today』1973
- (3) 国際学会友日本語学校編、『日本語Ⅰ』1981, 3版
- (4) 国際学会友日本語学校編『中国人のための日本語』1974
- (5) 国際基督教大学日本語科編『Modern Japanese for University Students Part I』1979改訂版
- (6) 国際交流基金編『日本語初歩Ⅰ, Ⅱ』1982
- (7) JORDEN, Elenor Harz, 『Beginning Japanese part 1, part 2』 Charles E. Tuttle Company 1974
- (8) 対外日本語教育振興会日本語テープ編集委員会編『Intensive Course in Japanese; Elementary part 1, part 2』ランゲージ・サービス刊 1960
- (9) 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校編『日本語Ⅰ』1979
- (10) 長沼直兄編者『Naganuma's Basic Japanese Course』1978重版
- (11) 長沼直兄著『Grammar and Glossary (Revised Edition)』1980改訂版
- (12) 早稲田大学語学教育研究所編『外国生用日本語教科書初級』1978再訂版

4. 参考文献

- 遠藤織枝, 1978, 「条件を表わす『ば』『たら』『なら』について」『東海大学留学生別科紀要第2号』, 東海大学
- 小野米一他, 1983, 「条件表現『と』『ば』『たら』『なら』の異同について」『北海道教育大学紀要第34巻第1号』, 北海道教育大学
- 川口さち子, 1984, 「ト・パ・タ・ナラによる条件表現の分析」『早稲田大学語学教育研究所紀要28』, 早稲田大学
- 北条淳子, 1964, 「条件の表わし方」『日本語教育4・5号』, 日本語教育学会
- , 1973, 「複文構成」『講座日本語教育第9分冊』, 早稲田大学語学教育研究所
- 久野 暉, 1973, 『日本文法研究』, 大修館
- 国広哲弥, 1982, 『意味論の方法』, 大修館
- , 1985, 「外国語学習の効用」『言語生活』4月号, 筑摩書房
- 言語学研究会・構文論グループ, 1985, 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(1)」『教育国語 81』, むぎ書房
- 小出慶一他, 1981, 「ト・パ・タラ」『アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター紀要4』, アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター
- 国語学会(編), 1980, 『国語学大辞典』, 東京堂
- 国際交流基金, 1983, 『日本語教科書ガイド』, 北星堂書店
- 国立国語研究所, 1951, 「現代語の助詞・助動詞」, 秀英出版
- , 1964, 『現代雑誌90種の用語用字第三分冊分析』, 秀英出版
- , 1984, 『日本語教育映画基礎編・教師用マニュアルユニット5』, シネセル
- 阪倉篤義, 1958, 「条件表現の変遷」『国語学33』, 国語学会
- 周馥卿, 1983, 「日本語の条件表現」『言語学論叢2』, 筑波大学

- 鈴木重幸, 1972, 『日本語文法・形態論』, むぎ書房
- 鈴木忍, 『文法 I (教師用日本語教育ハンドブック③)』, 1978, 国際交流基金
- 田中章夫, 1977, 「助詞(3)」『岩波講座日本語 7 文法 II』, 岩波書店
- 鶴田庸子, 1984, 「日本語教育のためのタラとバの分析」『日本語教育論集』, 国立国語研究所
- 寺村秀夫, 1981, 『日本語の文法 (下)』, 国立国語研究所
- , 1982, 「日本語における単文, 複文認定の問題」『講座日本語学・外国語との対照 II』, 明治書院
- 豊田豊子, 1978, 「接続助詞『と』の用法と機能 (I)」『日本語学校 論集 5 号』, 東京外国語大学附属日本語学校
- , 1979, 「発見の『と』」『日本語教育36号』, 日本語教育学会
- , 1979, 「接続助詞『と』の用法と機能 (III)」『日本語学校 論集 6 号』, 東京外国語大学附属日本語学校
- , 1982, 「接続助詞『と』の用法と機能 (IV)」『日本語学校 論集 9 号』, 東京外国語大学附属日本語学校
- , 1985, 「『と, ば, たら, なら』の用法の調査とその結果」『日本語教育56号』, 日本語教育学会
- 永野 賢, 1975, 「『もしも私が家を建てれば……』の文法」『新日本語 講座 2・日本文法の見えてくる本』, 汐文社
- 日本語教育学会(編), 1982, 『日本語教育事典』, 大修館
- 蓮沼昭子, 1985, 「『ナラ』と『トスレバ』」『日本語教育56号』, 日本語教育学会
- 浜田留美, 1970, 「タラと(レ)バ」『国際学友会日本語学校紀要 3 号』, 国際学友会
- 藤井美知子, 1982, 「初級段階における順接条件表現・バ・タラ・ナラの図示を試みる」『国際学友会日本語学校紀要 7 号』, 国際学友会
- 松村 明(編), 1969, 『古典語現代語助詞助動詞詳説』, 学燈社

- (編), 1971, 『日本文法大辞典』, 明治書院
- 三尾 砂, 1958, 『話しことばの文法』, 法政大学出版局
- 三上 章, 1953 (1972), 『現代語法序説』, くろしお出版
- , 1963, 『日本語の構文』, くろしお出版
- 南不二男, 1974, 『現代日本語の構造』, 大修館
- 宮島達夫, 1964, 「バトとタラ」『講座現代語 6・口語文法の問題点』, 明治書院
- 森田良行, 1967, 「条件の言い方」『講座日本語教育第3分冊』, 早稲田大学語学教育研究所
- , 1980, 『基礎日本語 2』, 角川書店
- , 1984, 『基礎日本語 3』, 角川書店

資 料

資料1. 使用語彙一覧

これは、この映画中に言語表現として現れた全ての語について一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
 - 2.—1. 接頭語「お」「ご」や、接尾語「さん」等は、見出し語として取り上げている。ただし、「おたく」「おとうさん」等は、そのまま見出し語に立てている。
 - 2.—2. 数詞は助数詞と切り離して見出し語に立てている。
 - 2.—3. 動詞は、終止形を見出し語にしている。
 - 2.—4. 形容動詞は、「___な」の形を見出し語にしている。
 - 2.—5. 「です」等に前接する「ん」は、一語扱いにして見出し語にしている。
 - 2.—6. 「おせわになる」「おらしく」等、慣用表現として扱ったものは、見出し語にしている。
 - 2.—7. 助動詞「た」や接続助詞「て」は、ここでは動詞部分に含め見出し語にしていない。ただし、「たら」「なら」は、動詞部分等から切り離し、見出し語に立てている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
 - 3.—1. 動詞は、本動詞としての用法と補助動詞としての用法で大きく二分した。本動詞の場合は「ます」形であるか、「—て」等の形であるかで下位分類し、補助動詞が違えばさらに下位分類してある。また常体での言い方は、一語扱いにして別の分類にした。
 - 3.—2. 「です」「でしょう」は、それに伴う終助詞の種類、また「ん」

が前接するかどうかにより下位分類してある。

- 3.—3. 助詞「か」「が」「に」「で」「の」等は、その意味・用法によって下位分類してある。
4. 「ます」「ました」については文例の列挙を省略し、文番号だけを示した。「ましょう」は省略していない。
5. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオでの文通し番号であり、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内では、この順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合にも、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文については通し番号を横に並べ、引用を一回ですませた。
6. 見出し語の横には〔 〕で常用漢字の範囲内で漢字を示し、またその横には（ ）で語の使用回数を示した。

ああ(8)

- ⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて いる おてらが あるわ。
- ⑧ ああ、ずいせんじでしょう。
- ⑨ ああ、にほんがの……。
- ⑩ ああ、どうも。
- ⑪ ああ、これですか。
- ⑫ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。
- ⑬ ああ、じゅんこ。
- ⑭ ああ、ふじさんが みえる。

あお〔青〕(1)

- ⑮ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

あじさい(5)

- ⑯ でも、いま、あじさいが とても きれいな。
- ⑰ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて いる おてらが あるわ。
- ⑱ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。
- ⑲ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。
- ⑳ あそこの あじさいは きれいですよ。

あそこ(2)

- ㉑ あそこの あじさいは きれいですよ。
- ㉒ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

あそぶ〔遊ぶ〕(1)

- ㉓ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか らね。

あたり〔辺り〕(1)

- ㉔ この あたりは、なつに なる と おおぜいの ひとが きます。

あっ(1)

㉗ あっ、そうね。

あめ〔雨〕(1)

① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

ありがとう(1)

㉘ ありがとう。

ある(5)

(1)㉙ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

㉚ ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あります。

㉛ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

(2)㉜ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいている おてらが あるわ。

㉝ この へんには たくさん あるの。

いい(7)

(1)㉞ いい いろですね。

㉟ いい おてんきねえ。

㊱ いい はなね。

(2)㊲ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。

(3)㊳ はやく つゆが おわると いいな。

㊴ みえると いいね。

(4)㊵ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

いう〔言う〕(1)

㊶ なんて いう はなかしら。

いえ〔家〕(2)

㊷ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいている おてらが あるわ。

㊸ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ

がわの よんけんめの いえです。

いく〔行く〕(9)

(1)⑩ いっしょに ずいせんじへ いきましょうよ。

③ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

(2)⑤ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。

(3)⑫ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

(4)⑫ ひだりの みちを まっすぐ いって、にほんめの みちを ひだり
にはいると、みぎがわに あります。

(5)⑨ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

⑧ もうすこし いくと、ずいせんじです。

(6)⑥ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

⑨ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいいよ。

いつも(1)

④ いつも じゅんこが おせわに なって います。

いっしょに(2)

⑩ いっしょに ずいせんじへ いきましょうよ。

③ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

いま〔今〕(1)

⑤ でも、いま、あじさいが とても きれいな。

いらっしゃる(1)

⑤ よく いらっしゃいました。

いる(4)

(1)④ いつも じゅんこが おせわに なって います。

(2)④ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

(3)⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。

(4)⑦ この はなの なまえ、しって いる？

いれる〔入れる〕(1)

⑤④ もうすこし こく したかったら、この いろを いれるんです。

いろ〔色〕(6)

④⑥ いい いろですね。

④⑦ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

④⑨ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

⑤② これは、この いろと、この いろを まぜると……。

⑤② これは、この いろと、この いろを まぜると……。

⑤④ もうすこし こく したかったら、この いろを いれるんです。

うえ〔上〕(1)

⑤⑧ かわいたら、その うえから ぬります。

うち(1)

⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの うちに こない？

うっすらと(1)

④⑦ うっすらと みえるわね。

うみ〔海〕(1)

⑤⑩ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

うん(3)

④ ⑤⑦ うん。

⑥⑦ うん、よかった。

ええ(6)

④ ⑤⑥ ⑩ ⑨⑧ ええ。

④⑫ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

⑤⑩ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

お(7)

④⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいている おてらが あるわ。

④⑫ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

- ⑬ おきゅくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。
⑮ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。
⑲ おともだちの はるこさん。
⑳ おじゃまします。
㉑ いい おてんきねえ。

おおい〔多い〕(1)

- ㉒ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

おおぜい〔大勢〕(1)

- ㉓ この あたりは、なつに になると おおぜいの ひとが きます。

おおまち〔大町〕(1)

- ⑳ おおまちで バスを おります。

おせわになる〔お世話になる〕(1)

- ㉔ いつも じゅんこが おせわに なって います。

おたく〔お宅〕(2)

- ㉕ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。
㉖ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

おとうさん〔お父さん〕(3)

- ㉗ おとうさん……。
㉘ ねえ、おとうさん。
㉙ よかったら、おとうさんも どう？

おらくに〔お楽に〕(1)

- ㉚ おらくに どうぞ。

おりる〔降りる〕(1)

- ㉛ おおまちで バスを おります。

おわる〔終わる〕(1)

- ㉜ はやく つゆが おわると いいな。

か(3)

- (1)㉝ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

(2)③ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

(3)⑤ ああ、これですか。

が(18)

(1)① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

③ はやく つゆが おわると いいな。

⑤ でも、いま、あじさいが とても きれいな。

⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて いる おてらが あるわ。

⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて いる おてらが あるわ。

⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う ちに こない？

⑫ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

⑬ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

⑮ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

⑰ ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あります。

⑲ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。

⑳ ずいせんじへ いくなら、こっこの みちが ちかいよ。

㉑ この あたりは、なつに なる と おおぜいの ひとが きます。

(2)⑲ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

⑳ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

㉑ ああ、ふじさんが みえる。

(3)④ いつも じゅんこが おせわに なって います。

(4)④ ふゆなら よく みえるんだが……。

かく〔書く〕(1)

⑥ じゃあ、ちづを かくわ。

かしら(3)

⑯ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

⑰ なんて いう はなかしら。

⑱ ふじさんも みえるかしら。

かまくら〔鎌倉〕(1)

⑲ かまくらで さんばんの バスに のります。

から(2)

⑳ かわいたら、その うえから ぬります。

㉑ どうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

から(2)

(1)⑲ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

(2)㉑ どうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

かわく〔乾く〕(1)

㉒ かわいたら、その うえから ぬります。

きく〔聞く〕(1)

㉓ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

きゃく〔客〕(1)

㉔ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

きれいな(5)

(1)⑲ あそのの あじさいは きれいですよ。

(2)⑰ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。

(3)⑱ わあ、きれいだ。

(4)⑯ でも、いま、あじさいが とても きれいね。

⑳ わあ、きれいね。

くる〔来る〕(5)

(1)⑰ この あたりは、なつに になると おおぜいの ひとが きます。

(2)⑧ きて よかったわね。

(3)⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？

(4)⑭ どうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

(5)⑮ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

くるま〔車〕(1)

⑲ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

けん〔軒〕(1)

⑳ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。

ご〔御〕(1)

㉑ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

こい〔濃い〕(1)

㉒ もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。

こう(1)

㉓ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。

ここ(2)

㉔ ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あ
ります。

㉕ ここも すてきだわ。

こっち(1)

㉖ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

この(1)

(1)⑱ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

⑲ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

⑳ これは、この いろと、この いろを まぜると……。

㉑ これは、この いろと、この いろを まぜると……。

- ⑤④ もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。
- ⑤⑦ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。
- ⑤⑮ この はなの なまえ、しって いる？
- (2)②④ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。
- ⑤① この あたりは、なつに になると おおぜいの ひとが きます。
- ⑤③ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですから
ね。
- ⑤⑨ この へんには たくさん あるの。

これ(2)

- ⑤① ああ、これですか。
- ⑤② これは、この いろと、この いろを まぜると……。

ころ(1)

- ⑤② つゆの ころに になると、よく みる はなですよ。

こんど〔今度〕(1)

- ⑤⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？

こんな(1)

- ⑤⑦ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

さあ(2)

- ⑤⑥ さあ、さあ。
- ⑤⑥ さあ、さあ。

さく〔咲く〕(1)

- ⑤① ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。

ざくろ(1)

- ⑤⑧ ざくろよ。

さん〔三〕(1)

- ⑤⑦ かまくらで さんぼんの バスに のります。

さん(5)

- ⑭ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。
⑮ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。
⑯ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。
⑰ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。
⑱ おともだちの はるこさん。

しごと〔仕事〕(1)

- ⑲ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

しつれい〔失礼〕(1)

- ⑳ ちょっと しつれい。

じゃ(1)

- ㉑ そう、じゃ、よかった。

じゃあ(1)

- ⑳ じゃあ、ちずを かくわ。

じゃま〔邪魔〕(2)

- ㉒ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。
㉓ おじゃまします。

じゆうな〔自由な〕(1)

- ㉔ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

じゅんこ〔順子〕(2)

- ㉕ いつも じゅんこが おせわに なって います。
㉖ ああ、じゅんこ。

しる〔知る〕(2)

- (1)㉗ この はなの なまえ、しって いる？
(2)㉘ しらないわ。

ずいせんじ〔瑞泉寺〕(6)

- ㉙ ああ、ずいせんじでしょう。
㉚ いっしょに ずいせんじへ いきましようよ。

- ㉑ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。
- ㉒ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。
- ㉓ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。
- ㉔ もうすこし いくと、ずいせんじです。

すぐ(4)

- (1)㉕ ここで、ひだりの みちにはいると、すぐ ちいさな はしが あります。
- ㉖ すぐ わかりました？
- ㉗ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

(2)㉘ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

すこし [少し] (1)

- ㉙ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

すてきな(1)

- ㉚ ここも すてきだわ。

すばらしい(1)

- ㉛ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

すみません(1)

- ㉜ すみません。

する(6)

- (1)㉝ おじゃまします。
- ㉞ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。
- (2)㉟ もうすこし こく したかったら、この いろを いれるんです。
- ㊱ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。
- (3)㊲ まいにち ひとりで しごとを して いるから。
- (4)㊳ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

そう(6)

- (1)㊴ ㉚ ㉞ そうね。
- ㊵ あっ、そうね。

(2)⑧⑩ そう、じゃ、よかった。

⑧⑩ そう。

そうだ(1)

⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？

そこ(1)

⑦⑨ はせがわさんの おたくなら、すぐ **そこ**ですよ。

そちら(1)

⑧⑩ そちらへ どうぞ。

その(1)

⑧⑨ かわいたら、**その** うえから ぬります。

そろそろ(1)

⑧⑨ **そろそろ**、あじさいを **みに** いきましょうよ。

そんな(1)

⑦⑨ **そんな** ふうに **した**かったら、この **ふ**で **こう** します。

だ(1)

⑧⑨ ふゆなら よく **みえる**んだが……。

たい(3)

(1)⑫ ええ、おてんきが よければ、いって **みたい**わ。

(2)⑤④ もうすこし **こく** **した**かったら、この **いろ**を **いれる**んです。

⑦⑨ **そんな** ふうに **した**かったら、この **ふ**で **こう** します。

たくさん(1)

⑦⑨ この **へん**には **たくさん** あるの。

だせる〔出せる〕(1)

④⑦ **こんな** **いろ**が **じゆう**に **だ**せたら、**すば**らしいわ。

たばこや〔たばこ屋〕(2)

④⑨ この **みち**を **すこし** **いく**と、**たばこ**やさんが **あり**ます。

④⑨ ええ、**たばこ**やさんで **き**いたら、すぐ **わか**りました。

たら(6)

- (1)④7 こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。
④8 もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。
④9 そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。
④0 よかったら、おとうさんも どう？
(2)④1 かわいたら、その うえから ぬります。
(3)④2 ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

ちいさな [小さな] (1)

- ④3 ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あります。

ちかい [近い] (2)

- (1)④4 とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。
(2)④5 ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

ちかく [近く] (2)

- ④6 ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。
④7 はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

ちかごろ [近ごろ] (1)

- ④8 ちかごろは、くるまも おおいのよ。

ちず [地図] (1)

- ④9 じゃあ、ちずを かくわ。

ちち [父] (1)

- ④0 おきゃくが ぐれば、ちちも とても よろこぶわ。

ちょっと(1)

- ④1 ちょっと しつれい。

つく [着く] (1)

- ④2 やっと ついたわね。

つごう〔都合〕(1)

- ⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？

つゆ〔梅雨〕(2)

- ③ はやく つゆが おわると いいな。
③② つゆの ころに なると、よく みる はなですよ。

て(1)

- ⑦⑦ なんて いう はなかしら。

で(6)

- (1)⑦⑦ かまくらで さんばんの バスに のります。

- ⑧⑧ おおまちで バスを おります。

- ⑩⑩ ここで、ひだりの みちにはいると、すぐ ちいさな はしが あ
ります。

- ⑩⑩ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

- (2)⑦⑦ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。

- (3)④④ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

でない(1)

- ⑮⑮ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

できる(1)

- ⑲⑲ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

でしょう(3)

- (1)⑧⑧ ああ、ずいせんじでしょう。

- ⑳⑳ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

- (2)④④ むずかしいんでしょうね。

です(10)

- (1)⑩⑩ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。

- ⑳⑳ もうすこし いくと、ずいせんじです。

- (2)㉞ はせがわさんの おたくなら、すぐそこですよ。
㉟ つゆの ころに になると、よく みる はなですよ。
㊱ あそこの あじさいは きれいですよ。
(3)㊲ いい いろですね。
㊳ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。
(4)㊴ ああ、これですか。
(5)㊵ どうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。
(6)㊶ もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。

でも(1)

- ㊷ でも、いま、あじさいが とても きれいね。

てら〔寺〕(1)

- ㊸ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。

てんき〔天気〕(2)

- ㊹ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。
㊺ いい おてんきねえ。

と(18)

- (1)㊻ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。
㊼ これは、この いろと、この いろを まぜると……。
(2)㊽ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。
㊾ ここで、ひだりの みちにはいると、すぐ ちいさな はしが あ
ります。
㊿ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。
㊿ ひだりの みちを まっすぐ いって、にほんめの みちを ひだり
にはいると、みぎがわに あります。
㊿ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

- ⑤② これは、この いろと、この いろを まぜると……。
- ⑦① この あたりは、なつに になると おおぜいの ひとが きます。
- ⑧② つゆの ころに になると、よく みる はなですよ。
- ⑨③ もうすこし いくと、ずいせんじです。

(3)③ はやく つゆが おわると いいな。

- ⑨② みえると いいね。

どう(1)

- ⑨② よかったら、おとうさんも どう？

とうきょう〔東京〕(1)

- ⑦③ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

どうぞ(2)

- ⑨③ そちらへ どうぞ。
- ④⑤ おらくに どうぞ。

どうも(1)

- ④④ ああ、どうも。

とても(2)

- ⑤⑤ でも、いま、あじさいが とても きれいな。
- ④③ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

ともだち〔友達〕(1)

- ⑨③ おともだちの はるこさん。

な(1)

- ③③ はやく つゆが おわると いいな。

ない(2)

- ⑩⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？
- ⑦⑥ しらないわ。

なつ〔夏〕(1)

⑦ このあたりは、なつになると おおぜいの ひとが きます。
なまえ〔名前〕(1)

⑦ この はなの なまえ、しって いる？

なら(6)

⑥ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。

⑥ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

⑥ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

⑦ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

(2)⑨ ふゆなら よく みえるんだが……。

(3)⑦ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

なる(2)

⑦ このあたりは、なつになると おおぜいの ひとが きます。

⑧ つゆの ころに なる、よく みる はなですよ。

なん〔何〕(1)

⑦ なんて いう はなかしら。

に〔二〕(2)

② はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。

③ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだり
に はいると、みぎがわに あります。

に(4)

(1)⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。

③ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだり
に はいると、みぎがわに あります。

⑦ この へんには たくさん あるの。

(2)⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う

ちに こない？

⑱ かまくらで さんぼんの バスに のります。

⑳ ここで、ひだりの みちにはいと、すぐ ちいさな はしが あります。

㉑ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

㉒ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに いると、みぎがわに あります。

㉓ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

(3)㉔ この あたりは、なつに なる と おおぜいの ひとが きます。

㉕ つゆの ころに なる と、よく みる はなですよ。

(4)㉖ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。

㉗ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですからね。

(5)㉘ そんな ふうに したかったら、この ふでで こう します。

にちようび〔日曜日〕(1)

⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの うちに こない？

にほんが〔日本画〕(1)

㉙ ああ、にほんがの……。

ぬる〔塗る〕(1)

㉚ かわいたら、その うえから ぬります。

ね(16)

① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

② ⑥ ㉛ そうね。

⑤ でも、いま、あじさいが。とても きれいなね。

④ いい いろですね。

④ むずかしいんでしょうね。

- ⑥① あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。
- ⑦① あっ、そうね。
- ⑦③ とうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。
- ⑦④ わあ、きれいね。
- ⑧① いい はなね。
- ⑧⑤ やっと ついたわね。
- ⑧⑥ きて よかったわね。
- ⑧⑨ みえると いいね。
- ⑧⑦ うっすらと みえるわね。

ねえ(2)

- (1)⑤① ねえ、おとうさん。
- (2)⑥⑥ いい おてんきねえ。

の②②

- (1)⑦⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。
- ⑦⑦ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて
いる おてらが あるわ。
- ⑩⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？
- ⑩⑩ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？
- ⑩⑦ かまくらで さんばんの バスに のります。
- ⑩⑨ ここで、ひだりの みちにはいと、すぐ ちいさな はしが あ
ります。
- ⑩⑩ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。
- ⑩⑩ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ

がわの よんけんめの いえです。

㉑ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

㉒ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

㉓ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

㉔ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

㉕ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

㉖ おともだちの はるこさん。

㉗ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

㉘ この あたりは、なつに なるとおおぜいの ひとが きます。

㉙ この はなの なまえ、しって いる？

㉚ つゆの ころに なる、よく みる はなですよ。

㉛ あそこの あじさいは きれいですよ。

(2)㉜ ああ、にほんがの……。

(3)㉝ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

㉞ この へんには たくさん あるの。

のぼる〔登る〕(1)

㉟ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

のる〔乗る〕(1)

㊱ かまくらで さんばんの バスに のります。

は(8)

㊲ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

㊳ この いろは、あとおみどりを まぜると できるわ。

㊴ これは、この いろと、この いろを まぜると……。

㊵ この あたりは、なつに なるとおおぜいの ひとが きます。

㊶ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

㉞ どうきょうから あそびに くるなら、この へんは ちかいですか
らね。

㉟ この へんには たくさん あるの。

㊱ あそこの あじさいは きれいですよ。

ば(5)

(1)㊲ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろごぼわ。

㊳ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

(2)㊴ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの う
ちに こない？

㊵ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

㊶ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

はい(3)

㊷ ㊸ ㊹ はい。

はいる〔入る〕(2)

㊺ ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あ
ります。

㊻ ひだりの みちを まっすぐ いって、にほんめの みちを ひだり
に はいると、みぎがわに あります。

はし〔橋〕(2)

㊼ ここで、ひだりの みちに はいると、すぐ ちいさな はしが あ
ります。

㊽ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ
がわの よんけんめの いえです。

はじめまして(1)

㊾ はじめまして。

バス(2)

㊿ かまくらで さんばんの バスに のります。

㊽ おおまちで バスをおります。

はせがわ〔長谷川〕(2)

②④ はせがわさんの おたくは、この ちかくでしょうか。

②⑦ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

はな〔花〕(4)

⑦⑤ この はなの なまえ、しって いる？

⑦⑦ なんて いう はなかしら。

⑧① いい はなね。

⑧② つゆの ころに なんと、よく みる はなですよ。

はやい〔早い〕(1)

③ はやく つゆが おわると いいな。

はるこ〔春子〕(1)

⑧③ おともだちの はるこさん。

ばん〔番〕(1)

①⑦ かまくらで さんばんの バスに のります。

ひだり〔左〕(4)

②① ここで、ひだりの みちにはいると、すぐ ちいさな はしが あります。

②② はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

②③ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりにはいると、みぎがわに あります。

②④ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりにはいると、みぎがわに あります。

ひと〔人〕(1)

⑦① この あたりは、なつに なんと おおぜいの ひとが きます。

ひとり〔一人〕(1)

①④ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

ふう(1)

⑥7 そんなふうにしたかったら、このふででこうします。

ふじさん〔富士山〕(2)

⑥1 ふじさんもみえるかしら。

⑥5 ああ、ふじさんがみえる。

ふで〔筆〕(1)

⑥7 そんなふうにしたかったら、このふででこうします。

ふゆ〔冬〕(1)

⑥4 ふゆならよくみえるんだが……。

ふる〔降る〕(1)

① まいにちまいにち、よくあめがふるわね。

へ(4)

①① いっしょにずいせんじへいきましようよ。

①③ そちらへどうぞ。

①⑤ ああ、ずいせんじへいくなら、いっしょにいきましようか。

①⑦ ずいせんじへいくなら、こっちのみちがちかいよ。

へん〔辺〕(2)

⑦③ どうきょうからあそびにくるなら、このへんはちかいですからね。

⑦⑤ このへんにはたくさんあるの。

ほら(2)

⑤③ ⑤⑤ ほら。

ほん〔本〕(2)

②① はしをわたって、にほんめのみちをひだりにまがると、みぎがわのよんけんめのいえです。

②③ ひだりのみちをまっすぐいって、にほんめのみちをひだりにはいると、みぎがわにあります。

ほんとう〔本当〕(1)

⑨⑥ ほんとう。

まあ(1)

㉔ まあ。

まいにち〔毎日〕(3)

① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

⑭ まいにち ひとりで しごとを して いるから。

まがる〔曲がる〕(1)

㉒ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

ました(3)

㉑ ㉒ ㉓

ましょう(3)

⑪ いっしょに ずいせんじへ いきましょうよ。

⑤⑨ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。

⑥⑩ ああ、ずいせんじへ いくなら、いっしょに いきましょうか。

ます(11)

⑰ ⑱ ⑲ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘

まぜる〔混ぜる〕(2)

④⑨ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

⑤⑩ これは、この いろと、この いろを まぜると……。

まっすぐ(1)

㉑ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

みえる〔見える〕(6)

(1)⑩ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

(2)⑩ みえると いいね。

(3)⑩ ふじさんも みえるかしら。

④⑨ ふゆなら よく みえるんだが……。

⑥ ああ、ふじさんが みえる。

⑦ うっすらと みえるわね。

みぎがわ〔右側〕(2)

⑱ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

⑳ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

みち〔道〕(6)

⑲ この みちを すこし いくと、たばこやさんが あります。

㉑ ここで、ひだりの みちにはいると、すぐ ちいさな はしが あります。

㉒ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

㉓ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

㉔ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

㉕ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

みどり〔緑〕(1)

④ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

みる〔見る〕(4)

(1)⑨ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。

(2)⑩ ええ、おてんきが よければ、行って みたいわ。

(3)⑪ つゆの ころに なると、よく みる はなですよ。

(4)⑫ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。

むずかしい〔難しい〕(1)

④ むずかしいんでしょうね。

め(3)

㉑ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

㉒ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

㉓ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。

めいわくな〔迷惑な〕(1)

㉔ ごめいわくで なければ、おじゃましても いいかしら。

も(5)

㉕ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

㉖ ここも すてきだわ。

㉗ よかったら、おとうさんも どう？

㉘ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

㉙ ふじさんも みえるかしら。

もうすこし(2)

㉚ もうすこし こく したかったら、この いろを いれるんです。

㉛ もうすこし いくと、ずいせんじです。

やっと(1)

㉜ やっと ついたわね。

よ(9)

㉝ いっしょに ずいせんじへ いきましょうよ。

㉞ はせがわさんの おたくなら、すぐ そこですよ。

㉟ そろそろ、あじさいを みに いきましょうよ。

㊱ ずいせんじへ いくなら、こっちの みちが ちかいよ。

㊲ ちかごろは、くるまも おおいのよ。

㊳ ざくろよ。

㊴ つゆの ころに なると、よく みる はなですよ。

㊵ あそこの あじさいは きれいですよ。

㊦ あそこに のぼれば、うみが みえますよ。

よい(6)

(1)㊧ そう、じゃ、よかった。

㊨ うん、よかった。

㊩ きて よかったわね。

(2)㊪ そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの うちに こない？

㊫ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

(3)㊬ よかったら、おとうさんも どう？

よく(4)

(1)㊭ ふゆなら よく みえるんだが……。

(2)㊮ まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

㊯ つゆの ころに なると、よく みる はなですよ。

(3)㊰ よく いらっしゃいました。

よろこぶ〔喜ぶ〕(1)

㊱ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

よん〔四〕(1)

㊲ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。

わ(12)

(1)㊳ ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいている おてらが あるわ。

㊴ ええ、おてんきが よければ、いって みたいわ。

㊵ おきゃくが くれれば、ちちも とても よろこぶわ。

㊶ じゃあ、ちずを かくわ。

㊷ こんな いろが じゆうに だせたら、すばらしいわ。

㊸ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

㊹ ここも すてきだわ。

⑦⑥ しらないわ。

(2)① まいにち まいにち、よく あめが ふるわね。

⑧⑤ やっと ついたわね。

⑧⑥ きて よかったわね。

⑧⑦ うっすらと みえるわね。

わあ(3)

⑧④ わあ。

⑧④ わあ、きれいね。

⑧⑤ わあ、きれいだ。

わかる [分かる] (2)

②⑨ すぐ わかりました？

②⑩ ええ、たばこやさんで きいたら、すぐ わかりました。

わたし(2)

⑦① ああ、わたしの いえの ちかくに あじさいが きれいに さいて いる おてらが あるわ。

⑦② そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの うちに こない？

わたる [渡る] (1)

⑦③ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎ がわの よんけんめの いえです。

を(四)

(1)⑭ まいにち ひとりで しごとを しているから。

⑭⑥ じゃあ、ちずを かくわ。

⑭⑦ この いろは、あおと みどりを まぜると できるわ。

⑭⑧ これは、この いろと、この いろを まぜると……。

⑭⑨ もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。

⑭⑩ そろそろ、あじさいを みに いきましようよ。

⑭⑪ あじさいを みるなら、ずいせんじが いいですね。

- (2)⑩ このみちを すこし いくと、たばこやさんが あります。
- ⑪ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。
- ⑫ はしを わたって、にほんめの みちを ひだりに まがると、みぎがわの よんけんめの いえです。
- ⑬ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。
- ⑭ ひだりの みちを まっすぐ 行って、にほんめの みちを ひだりに はいると、みぎがわに あります。
- (3)⑮ おおまちで バスを おります。

ん(3)

- ⑯ むずかしいんでしょうね。
- ⑰ もうすこし こく したかったら、この いろを 入れるんです。
- ⑱ ふゆなら よく みえるんだが……。

資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画
「あそこに のぼれば うみが みえます」
——条件の表現 1——

企 画 国立国語研究所
制 作 日本シネセル株式会社
フィルム 16m/mEKカラー・スタンダード
巻 数 全1巻
上映時間 5分
現 像 所 東映化学
録 音 読売スタジオ
完 成 昭和56年8月31日

制作スタッフ

制 作	静 永 純 一	制作担当	佐 藤 吉 彦
脚 本	前 田 直 明	演 出	前 田 直 明
演出助手	野 澤 和 之	撮 影	相 良 国 康
撮影助手	渡 辺 晶	照 明	伴 野 功
照明助手	水 村 富 雄		
録 音	谷 口 幸 充 (読売スタジオ)		
ネガ編集	斎 藤 康 一		

配 役	春 子	後 藤 真寿美
	順 子	寺 内 よりえ
	順子の父	大 木 史 郎
	たばこ屋のおばさん	石 黒 麗 子
	(順子の父の声)	吉 水 慶
	(たばこ屋のおばさんの声)	石 原 由起子

カット	画 面	セ リ フ
1	メイン・タイトル 「日本語教育映画」	
2	テーマ・タイトル 「あそこに のぼれば うみ が みえます」 ——条件の表現 1——	
3	<大学> 大学の外景（雨が降っている）	
4	教室内 窓ぎわで話をしている春子と 順子	春子「①まいにち、まいにち よく あめが ふるわ ね。」 順子「②そうね。 ③はやく つゆが お わると いいな。」
5	雨に濡れるあじさい	春子「④うん。 ⑤でも、いま、あじさ いが とても きれい ね。」
6	窓ぎわで話を続ける二人	順子「⑥そうね。 ⑦ああ、わたしの い えの ちかくに あじ さいが きれいに さ いて いる おてらが あるわ。」
7	春子（カメラ 順子の肩越し から）	春子「⑧ああ、ずいせんに しょう。」
8	順子	順子「⑨ええ。 ⑩そうだ、こんどの にちようび、つごうが よければ、わたしの うちに こない？ ⑪いっしょに ずいせ んじへ いきましょう

9	春子	よ。」 春子「⑫ええ、おてんきが よければ、いって み たいわ。」
10	二人	順子「⑬おきやくが くれれば、 ちちも とても よろ こぶわ。 ⑭まいにち、ひとりで しごとを して いる から。」 春子「⑮ごめいわくで なけ れば、おじゃましても いいかしら。」 順子「⑯じゃあ、ちずを か くわ。——
11	地図をかく順子 地図 地図をかく手 地図	⑰かまくらで さんば んの バスに のりま す。 ⑱おおまちで バスを おります。 ⑲この みちを すこ し いくと、たばこや さんが あります。 ⑳ここで、ひだりの みちに はいると、す ぐ ちいさな はしが あります。 ㉑はしを わたって、 にほんめの みちを ひだりに まがると、 みぎがわの よんけん めの いえです。」 春子「㉒ありがとう。」
12	<鎌倉> バスから降りる春子 地図を描いた紙切れを手にも	

- | | | |
|----|---------------------------------|---|
| | って歩く | |
| 13 | たばこ屋
おばさんが座っている
たばこ屋に寄る春子 | |
| 14 | 春子（おばさん肩越し） | 春子「 ²³ すみません。
²⁴ はせがわさんの お
たくは、この ちかく
でしょうか。」 |
| 15 | おばさん | おばさん「 ²⁵ ああ、にほんが
の……。」 |
| 16 | 春子 | 春子「 ²⁶ ええ。」 |
| 17 | おばさん（春子肩越し） | おばさん「 ²⁷ はせがわさんの
おたくなら、すぐ
そこですよ。
²⁸ ひだりの みち
を まっすぐ い
って、
にほんめの みち
を ひだりに は
いると、みぎがわ
に あります。」 |
| 18 | 実景
Y字路 | |
| 19 | 道、移動 | |
| 20 | カメラ移動して門 | |
| 21 | <順子の家>
門から入ってくる春子、順子 | 順子「 ²⁹ すぐわかりました？」
春子「 ³⁰ ええ、たばこやさん
で きいたら、すぐ
わかりました。」
順子「 ³¹ そう、じゃ、よかつ
た。」
順子「 ³² おとうさん……。」 |
| 22 | 画室の窓口で父に呼びかける
順子 | 順子「 ³³ おともだちの はる
こさん。」 |
| 23 | ふりむく父 | 父「 ³⁴ ああ、どうも。
³⁵ よく いらっしやいま
した。
³⁶ さあ、さあ。」 |
| 24 | 春子 | |
| 25 | 日本画を描いている父 | |

- 26 画室にあがる順子，春子
日本画を描いている父，道具
をかたづけ始める
- 27 日本画（春子肩越し）
- 28 春子，順子に話しかける
- 応える順子
- 29 皿を取って色を混ぜる父
- 30 混ぜた皿を持った手もと
- 31 春子
- 32 描きかけの日本画
- 33 絵を描いてみせる父，手もと
- 春子「②⑦おじゃまします。」
父「②⑧そちらへ どうぞ。」
春子「②⑨はい。——
②⑩はじめまして。」
父「②⑪いつも じゅんこが
おせわに なって いま
す。」
順子・春子「②⑫まあ。」（笑い
声）
父「②⑬おらくに どうぞ。」
春子「②⑭はい。」
父「②⑮ちょっと しつれい。」
春子「②⑯いい いろですね。
②⑰こんな いろが じ
ゆうに だせたら，す
ばらしいわ。
②⑱むずかしいんでしょ
うね。」
順子「②⑲この いろは，あお
と みどりを まぜる
と できるわ。
②⑳ねえ，おとうさん。」
父「②㉑ああ，これですか。
②㉒これは，この いろと，
この いろを まぜると
……。
②㉓ほら。」
父「②㉔もうすこし こく し
たかったら，この いろ
を 入れるんです。
②㉕ほら。」
春子「②㉖ここも すてきだわ。」
父「②㉗そんな ふうに した
かったら，この ふでで
こうします。
②㉘かわいたら，その う

34 35	完成した日本画 話す順子, 春子, 父	えから ぬります。」 順子「⑤そろそろ, あじさい を みに いきましょ うよ。」 春子「⑥ええ。」 父「⑦あじさいを みるなら, ずいせんじが いいです ね。」
36 37	立ちあがる三人 <瑞泉寺近くの道>	順子「⑧よかったら, おとう さんも どう?」 父「⑨ああ, ずいせんじへ いくなら, いっしょに いきましようか。」 順子「⑩わあ。」 春子「⑪はい。」
38 39	三人散歩をしている。別れ道 二人を呼び止める父 戻る二人 歩く三人 (移動) 道の両側には塀や垣根, 草木, 樹木	順子「⑫いい おてんきねえ。」 春子「⑬うん, よかった。」 父「⑭ああ, じゅんこ。 ⑮ずいせんじへ いくなら, こっちの みちが ちかいよ。」 順子「⑯あつ, そうね。」 父「⑰この あたりは, なつ に なるとおおぜいの ひとが きます。」 順子「⑱ちかごろは, くるま も おおいのよ。」 父「⑲とうきょうから あそ びに くるなら, この へんは ちかいですから ね。」
40	立ち止まる三人。垣根越しに ざくろがある ざくろ	春子「⑳わあ, きれいな。」 順子「㉑この はなの なま え, して いる?」

		<p>春子「⑦⑥知らないわ。 ⑦⑦なんていうはなかしら。」</p>
41	春子, 順子	<p>順子「⑦⑧ざくろよ。 ⑦⑨このへんにはたくさんあるの。」</p>
42	父	<p>春子「⑦⑩そう。 ⑦⑪いいはなね。」</p> <p>父「⑦⑫つゆのころになると、よくみるはなですよ。」</p>
43	三人, 歩き出す	<p>父「⑦⑬もうすこしいくと、ずいせんじです。 ⑦⑭あそこのあじさいはきれいですよ。」</p>
44	<p><瑞泉寺境内> 山門をくぐる三人</p>	<p>春子「⑦⑮やっとなつたわね。」 順子「⑦⑯きてよかつたわね。」 春子「⑦⑰うん。」</p>
45	あじさい	<p>順子「⑦⑱わあ、きれいだ。」</p>
46	<p>あじさいから移動 境内を歩く三人, 立ち止まる。</p>	<p>春子「⑦⑲そうね。」</p>
47	山を指す父	<p>父「⑦⑳あそこにのぼれば、うみがみえますよ。」</p>
47	山	<p>順子「⑦㉑ふじさんもみえるかしら。」</p>
48	歩きだす三人	<p>父「⑦㉒みえるといいね。」 順子「⑦㉓ええ。」</p>
49	山へ登る三人	<p>父「⑦㉔ふゆなら、よくみえるんだが……。」</p>
50	富士山	<p>順子「⑦㉕ああ、ふじさんがみえる。」</p>
50		<p>春子「⑦㉖ほんとう。 ⑦㉗うっすらとみえるわね。」</p>
51	<p>タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社</p>	

日本語教育映画解説22

あそこに のぼれば うみが みえます

——条件の表現1——

昭和61年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14

電話東京(900)3111(代表)

印刷所 文唱堂印刷株式会社

電話(851)0111(代)